
機動戦士ガンダム00 The human race's reformation

K-15

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 The human race - s
eformation

【Zコード】

N2096V

【作者名】

K-15

【あらすじ】

ソレスター・ビーリングが武力介入をして4年が過ぎた。
それでも世界は変わらなかつた。
数多の戦いを得てバナージ・リンクスは何を思うのか。

第一話 可能性の獣

西曆 2312 年

ソレスタルヒーイングは再び世界の変革の為に戦い始める。

ロールアウトしたばかりのダブルオーガンダム、オーガンダムとガンドムエクシアのGNドライブを2機使用した第4世代の新たなガンダム。

かつた。

ムのマッチング作業を進めるが考えうるすべてのプランを行つても
イアン・ヴァステイとティエリア・アーティシングライブシステム

「これでもダメか！安定領域まであと10%なんだが。」

一番同調率が良かつた。

「エランサムで強制に起動を掛けられは、
馬鹿言つた、そんな事をすればオーバーロードして自爆だ。」

—ならもう一度システム…うう…!?」

突然口を押さえ苦しそうな表情になるティエリア。

もじなむせ

何とも言えない不愉快な感覚が頭に入ってくる。

メディアカルームで体を調べたが原因は不明だつた。コンピューターでは正常と判断されてい。

「おい、大丈夫か？」

「・・・はい、心配は要りません。もう一度システムの再点検を。「本当に大丈夫なのか？まあいい、後は俺がやるからお前は休め。」「了解しました。」

ダブルオーガンダムからの通信が途切れる。

イアンはもう一度一人でツインドライブシステムを稼動させるためプログラムを組む。

そのころ宇宙のアロウズの部隊がプトレマイオスを捕捉していた。新型のアヘッジでソレスタークリーニングに迫ろうとしている。ラッセは王留美からの情報でアロウズの接近して来ているのを察知する。

「アロウズにこちらの位置を知られた。」

敵は複数のMSを保有しているがこちらにはティエリアのセラヴィーガンダム1機しか戦闘出来るMSは無い。ダブルオーガンダムのパイロットの刹那・F・セイエイもまだ戻つて来ていない。

ティエリアはたった一人でアロウズの迎撃に出る。

「ティエリア・アーデ、出撃する。」

プトレマイオスのハッチが展開しカタパルトからセラヴィーガンダムが出撃する。

ティエリアを援護するためセンサー障害のあるミサイルをアヘッジの部隊に放つ。

「センサーに障害だと！？作戦変更、迂回して輸送艦を叩く。」

それでも時間稼ぎ程度にしか成らない。

長距離からのミサイルではMSを数機しか命中させることができない。

ミサイルに直撃してもMSは破壊までは至らない。

「セラヴィー、目標を迎撃する。」

GNバズーカを両肩に抱えて貯蔵したGN粒子を開放する。

背部の装甲がスライドし顔のようなものが浮かび上がる。

「高濃度圧縮粒子充填、GNバズーカ圧縮粒子開放。」

ティエリアがアームレイカーのトリガーを引くと顔から緑の粒子が

発生し高出力のビームが発射される。

周囲に漂つテブリも巻き込みながらビームがアヘッジの部隊に命中する。

生き残ったMSはセラヴィーに攻撃を始める。

「第2小隊はスペースシップを！残りはガンダムを引き付けろ！」

アロウズのアヘッジ部隊が動き出す。

複数でセラヴィーを追い込むうどビームライフルを連射する。

機動性の低いセラヴィーはGNフィールドを開けし機体を敵のビームから守る。

だがそうしている間にセラヴィーをすり抜けたアヘッジがプトレマイオスに迫ろうとしていた。

ライル・ディランティとスメラギ・李・ノリエガを回収した刹那は小型輸送船でアロウズとソレスタークリーニングの戦いを見ていた。戦況は思わしくない。

刹那は通信機でプトレマイオスに繋げる。

「イアン、ダブルオーを出す。」

「ちょっと！ちょっと待って刹那、二つちはまだ！」

「時間がない。」

そう言うと刹那はシートから立ち上がりニールに操縦を代わらせる。「何で俺がこんなことを。」

愚痴をこぼしながらもニールは操縦桿を握る。

刹那との通信が終わつてしまふると完成途中のダブルオーガンダムがカタパルトに移動させられる。

プトレマイオスのMSハッチが開き奥に青い機体が見える。

「アレがソレスタークリーニングの。」

ニールは開いたハッチに向かい操縦桿を操作する。

刹那は青いパイロットスーツに着替えると危険を顧みず小型輸送船から飛び出す。

「ダブルオー、オーガンダムとエクシアの太陽炉を乗せた機体。俺のガンダム。」

スーツのバーニアを噴かしてカタパルトのダブルオーガンダムに乗り込む。

コクピットに入るとパネルを操作しツインドライブシステムを機動させようとする。

「刹那、ダブルオーはまだ」

「トランザムを使う。」

「無茶だ！刹那止せ！」

イアンは画面越しに必死に刹那を止めようとするとが聞こいつしない。

「トランザム始動！」

機体が赤く光りだし戦闘画面にトランザムと表示される。それでもGNドライブの安定機動には至らない。

「トランザムでもダメか。」

「MS2機急速接近中ですう！」

GNドライブから緑の粒子が発生する。

「目覚めてくれダブルオー！」

次第に粒子量が増えて行く。

「ここにはオーガンダムとエクシアと」

セラヴィーとトレマイオスの攻撃を抜けたアヘッドが目の前でビームライフルを構える。

「俺が居る！」

ツインドライブを前方に出し大量のGN粒子を放送出する。

それによりアヘッドのビームライフルは焼き消されてしまつ。

ダブルオーのツインドライブから放出されるGN粒子がトレマイオスからも溢れ出す。

溢れたGN粒子が渦のように動き宇宙に光の橋を作り出す。

光の橋から何かに導かれるように1機の白いMSが流れてくる。

それは可能性と言う名の獣。人類の革新。

「ダブルオーガンダム、刹那・F・セイエイ出る！」

これから人類はどう進化していくのだろうか。

第一話 可能性の獣（後書き）

「メントお待ちしておつます。
たくさん書いてくれるといつれじいです。

第一話 白雨の機影（前書き）

毎度の如く話は短いです。

第一話 白亜の機影

緑の粒子に惹かれるよつて血壓のMSはゆうりと流れていぐ。

ツインドライブの起動したダブルオーガンダムがトレマイオスから出撃する。

GNドライブを2機搭載した事により粒子量が格段に増大している。

と行動に移る。

ムを寄せ付けない。

殺那はヒーム攻撃を避けたところ、ヒームは装備されているヒームハーフィルを使かう。

挿している。

「なつ！？何だと！」

発射されたビームがアヘッジを脆くも破壊する。

アヘッジの部隊はダブルホーの性能に驚きを隠せないで居た。

今のMSにはGNドライブが標準搭載されている。

年齢の少い方にカンパニーに運営を取るにでかない
神形を整えらう一度ダブルオ一攻撃を仕掛けた、

残ったアヘッド全機で一斉にビームライフルを発射する。

「GNフィールド作動。」

両肩のGNドライブが前方に移動すると大量のGN粒子がダブルオーラを覆う。

アヘッドのビームは再びGN粒子に撃き消されてしまった。だがジンクスのパイロットはその性能を逆手に取る。

腰にマウントされているビームかく乱幕のグレネードを投げつける。グレネードは爆発するが周囲に被害は無い。

ダブルオーはGNソードのビームライフルを使うがビームかく乱幕によりビームがジンクスまで届かない。

「これでビームは使えない！接近戦ではコッチが有利！」

右腕にあるGNランプでダブルオーに突撃する。

刹那はGNソードをライフルモードから実体剣に切り替える。

「これが俺達の…」

ダブルオーもGNソードを構えるとアヘッドに接近戦を仕掛ける。ツインドライブを最大出力にして一気にスピードを上げる。

目前と迫るアヘッド、GNソードを振りかぶる。

GNランプと交わり火花を上げる。

「ガンダムだ！」

GNソードは滑るようにアヘッドの胴体を両断し機体が爆発する。GNドライブの赤い粒子が爆発と同時に宇宙空間に漂う。

「つく！撤退だ！」

アヘッドの性能では太刀打ち出来ないと判断した部隊長が残ったMSの撤退を始める。

だがそれを見逃すティエリアでは無い。

「ijiから逃げられると思つたな…」

背中を向けるアヘッドにGNバスターで砲撃を開始する。高出力のビームから逃げれずに次々と飲み込まれていく。

「敵MS、撤退して行くですぅ！」

「取りあえず一安心だな。」

ブトレマイオスのブリッジでミレイナとラッシュがレーダーで敵の撤退を確認すると安心して声を出す。

戦闘が終わりブリッジに安らぎの空気が漂う。

「待つて、C-36ポイント付近からアンノウンが接近中…」

「何！？」

フェルトがレーダーで未確認の兵器を察知すると再びブリッジがピリピリとした空気へ変わる。

「映像入りましたですぅ。」

ブリッジの戦闘画面に小さく機影が映し出される。

物凄いスピードで見る見る内に近づいてくる、映像に映る姿がよりハツキリと映る。

「角？」

「真っ白でキレイですか。」

「・・・」

その姿はみながらむじょ話で圧していくゴーラーンのよつに見えた。フェルトは冷静に接近するアンノウンに対処しようとデータを採取する。

「現在存在するどのはMSのデータとも該当しません。それにあのMSにはGNドライブが搭載されていません。」

そのMSからは擬似GNドライブから放出される赤い粒子が発生している。

レーダーにもGN粒子の反応は出ていなかつた。

「アッシュだ！」の不愉快な感覚は…」

「ティエリア、どうしたの？」

突然声を荒げるティエリア、こんなのは今までにもあまり見た事が無い。

ブトレマイオスに帰艦しようとしていたセラヴィーが旋廻して離れていく。

方向はある白星のMS。

コクピットの中でバナージ・リンクスは眠つていた。

第一話 白雨の雰影（後書き）

「メンタお待ちしておつまむ。

第三話 ハンタクト

「ティエリア！」

「コレだ、この不愉快な感覚は同じだ。」

謎のアンノウンに向かうティエリアを刹那は呼び止めようとするがセラヴィーはスピードを緩めない。

このままではアンノウンと接触してしまつ。

刹那もダブルオーをアンノウンの方向に向けて飛び出す。

しかしダブルオーの機動性でもセラヴィーに追いつく頃にはアンノウンと接触しているだろう。

「Jの頭の中を覗かれるような感触は何だ？」

ティエリアは依然不愉快な感覚に包まれたままだった。

近づくにつれてその感覚も大きくなつていく。

何故かはわからないがアレを落とせばJの奇妙な感覚も治るのではないかと感じた。

セラヴィーを全速力でアンノウンに向かわせる。

「見つけた！」

真っ暗な宇宙空間での真っ白な機体の色はよく目立つ。

レーダーの反応よりも早く捉えたティエリアはGNバズーカを構えさせる。

「高濃度圧縮粒子開放。」

背部の装甲がスライドし顔が浮かび上がる。

GN粒子が大量に発生し銃身にエネルギーがチャージされていく。チャージされたエネルギーはピンク色のボールのように形成されている。

「ダブルバズーカ、バーストモード。」

高出力のビームが玉となつて発射される。

ビームはデブリを破壊しながらアンノウンに飛んでいく。

白い機体はバー二アを吹かし高速で迫るセラヴィーのビームを右に一回転して回避してしまう。

「動きに隙が多い！」

連結したGNバズーカを切り離す。

GNキャノンとGNバズーカの6門でビームの弾幕を張る。数もさることながらセラヴィーの特性からビームもすべてが高出力である。

白い機体は次第に追い込まれていく。

ビームが機体をかすめる。

ビームの弾幕を避けきる事は難しく激しくバー二アを吹かしアンバツクで機体を制御する。

だが必死に避けきつても最後には隕石にぶつかってしまい動きが止まってしまう。

それを見逃すティエリアでは無い。

GNバズーカを両肩に乗せるとすぐさまチャージを開始する。

「貰った！」

ツインバスター キャノンのビームを避ける事は不可能。ビームの光りに白い機体が照らし出される。

左腕のシールドを構えて最後の抵抗をする。

「無駄だ、そんなシールドで防ぎきれるわけがない。」

白い機体のシールドがX字にスライドする。

シールド中央には丸いエネルギー発生器が着いている。

「！？ そんな・・・」

ビームはシールドに直撃する寸前で弾かれてしまう。ビームが途切れるとシールドはまた元の姿に戻った。

「ならば接近戦で！」

ビームサーベルを引き抜く。

白い機体には武器らしきものは見当たらない。

「沈め――！」

ビームサーベルを振りかぶる。

だが今度は右腕からトンファーのように白い機体もビームサーべルを発生させセラヴィーの攻撃を受け止めてしまう。

「くつ！」のまま押し切る！

GNドライブの出力を上げると、機をGN粒子が空間を漂う。

「うすはいつ二トコソジ

田町の機械のソノソフン・バ説、出る。

装甲の隙間から鮮やかなピンクの粒子があふれ出す。

ティニアの乗ったセラウイーは何かに引張られるみたいに血

柳家花月集

なる。

胸の装甲がストライキシ内部のフレームがあらわになる。

マジックの世界で、アーティストの才能が発揮する。

ランドセルが左右に展開し4機の大型バニアが、シールドもX字に展開する。

レムがビンタ色は発光した料子とは違ひ謡の料子が舞ふ

それまでフヅィーを追いかけていた剝離

もうすぐ傍まで来ていた時にソレは起つた。

象徴である角千葉林の「千葉林」を経て林の「林」

「「ガンダム！！！」

ヴェーダを通じてリボンズも白亜の機体の変貌した姿を見ていた。

初めはダブルオーのツインドライブシステムを見る為だつた。
しかしそれ以上に衝撃的なことが起こつていて、
ヴェーダにはあの機体のデータは載つていない。

ヴェーダに載つていないガンダムが何故ココに居るのか。
「あの機体は何だ？」

「へえ、レベル7まで掌握したキミにも分からんんだ・・・」

ソファーに座るリボンズにリジエネはからかう様に言つ。

「・・・・・」

「ふふつそんなに怒らないでよ。」

「そんな事は無いよ。」

「どうなると思う？」

「アイツの戦闘能力は未知数だ。成り行きを見守る事にするよ。」

そう言うとリボンズは微笑む。

デストロイモードに変身したユニコーンガンダムとセラヴィーガン
ダムとダブルオーガンダムの戦闘が始まつとしていた。

第三話 パンタクト（後書き）

パメントお待じいだおつま。

第四話 新たなガンダム

「デストロイモードへと変化したヨニコーンガンダムが動き出す。ラングセルからビームサーベルを引き抜くとティエリアの前から姿が消える。

「！？」

サイコフレームの作用で今までとは比べ物にならないほど機動性にティエリアは反応出来ない。

あまりのスピードにさながら瞬間移動のように見えた。

気づいた時には右手に握っていたGNバスターが切断されていた。

「！」の力は！？」

破壊されたGNバスターを放棄しヨニコーンガンダムを捕らえようとする。

サイコフレームの輝きがヨニコーンを照らす。

ヨニコーンが移動するとそこには赤い粒子が漂っていた。

「コレ以上はやらせん！」

ヨニコーンとセラヴィーのビームサーベルが交わる。

「ティエリア、援護する！」

ダブルオーもGNソードのライフルを動きの止まったヨニコーンへ連射する。

だがデストロイモードになつたヨニコーンの反応速度の前ではこの程度の攻撃は余裕で回避出来る。

セラヴィーの胴体を蹴り飛ばすとその反動を利用してビームを回避する。

照準をダブルオーに絞るとまた姿が消える。

「早い！？」

すると視界から消えたヨニコーンが背後から迫る。

「そこか！」

GNビームサーベルを引き抜き振り向き様になぎ払つとヨニコーン

のビームサーベルと鍔迫り合いになる。

そのまま握っているGNソードでユニコーンを斬りかかるとする。

「防いだ！？」

X字のシールドがコレを防ぐと頭部のバルカン砲がダブルオーを襲う。

「くつ！」

バルカン砲から逃れるために距離を取りながらツインドライブを前方に出し弾を防ぐ。

「刹那、挟み込む。」

「了解、攻撃行動に移る。」

ユニコーンにはバルカン砲とビームサーベルしか武装は見当たらぬい。

二人は射撃戦で仕留めようとする。

それでもユニコーンはバーニアを使った俊敏な動きで2機のビーム攻撃を避けきる。

機械制御による操縦で動きは直線的だが圧倒的なスピードで攻撃を寄せ付けない。

縦横無尽に動き回るユニコーンは右手に握ったビームサーベルをセラヴィーに投げる。

回転してピンク色に円を描きながら真っ直ぐに飛んでいく。

ティエリアは高濃度のGNフィールドでコレを弾き飛ばす。

「何処だ！？」

「下から来るぞ！」

防いでいる間に又してもユニコーンの姿を見失ってしまう。

セラヴィーの足元にビームサーベルが届こうとしていた。

「やらせるものか！」

GNキヤノンに付いている隠し腕からセラヴィーもビームサーベルを出す。

寸前の所で直撃を免れるがユニコーンも左腕に装備されているサーベルラックを稼動させもう一撃加えようとする。

「まだもう一本残つてゐるのか！」

迫るビームトンファー、今からでは防ぎきれない。

ティエリアは覚悟を決めた。

「トランザム！！！」

セラヴィーの装甲が赤く発光し瞬時にユニコーンから離れる。

ビームトンファーが何も無い空間を斬りぬく。

「はああつ！！」

ダブルオーのGNソードをユニコーンがシールドで受け止める。

「離れる、刹那！」

トランザムを発動させたセラヴィーが隠し腕を出し6本のビームサーベルを持つ。

刹那がユニコーンから離れるとセラヴィーのビームサーベルによる連撃が始まる。

右から、左から、6本のビームサーベルで斬りつけるがユニコーンも残つた3本のビームサーベルとビームトンファーで格闘戦を仕掛ける。

手数はセラヴィーの方が多いがユニコーンの反応速度が勝っていた。ユニコーンが斬り抜けるとセラヴィーの右手が、両肩のGNキャノンの隠し腕が切断された。

「なに！？トランザムまで！」

「後は俺がやる。ティエリアは離脱を！」

「くつ！？」

ティエリアは損傷した機体でバーニアを全開にし最後の攻撃を仕掛けた。

アンバウクで姿勢制御し振り返るユニコーンに体当たりをする。

セラヴィーの重い機体重量がユニコーンを吹き飛ばす。

「くうううつ！」

当然ティエリアにもその衝撃は伝わる。

吹き飛んだユニコーンはバーニアを噴かすが間に合わずデブリに背後から激突する。

「ティエリア！無事か？」

「機体の損傷が激しい。これ以上は・・・」

「ヤツは・・・！」

ユニコーンのサイコフレームの光りが無くなっていく。
鮮やかなピンクはグレーに変わりただのフレームになる。
装甲もスライドし元の姿へ戻っていく。
数秒で角の付いた白亜の機体になる。

「元の姿に戻った！？」

「どうする、破壊するか？」

「・・・いや、トレミーに連れて行く。僕の記憶ではヴェーダにこのガンダムのデータは無い。調べる必要がある。」

「了解、アンノウンを捕獲する。」

ダブルオーが動きの止まったユニコーンの腕を掴みプトレマイオスまで引っ張っていく。

ユニコーンのコクピットの中でバナージ・リンクスはまだ静かに眠っている。

第四話 新たなガンダム（後書き）

「」意見、「」感想お待ちしております。

第五話 四覚の時（前編）

コメント、アドバイス等お待ちしております。
良い事も悪いことやじやんじやん書いてください。

第五話 田覚めの時

プトレマイオスに帰艦するセラヴィーとダブルオー、そして突然襲い掛かってきた謎の機体。

ガイドビー・コンに沿って着艦準備に入る。

ダブルオーが腕を引つ張りユニークーンをゆっくりと格納庫に移動させる。

「そいつは一番奥に入れろ、カタパルトへ固定させる。」

「了解、セラヴィーはどうなっている?」

「手痛くやられているな。つたく！新型だつつのに！」

イアンは愚痴を零しながら刹那を誘導しユニークーンを移動させる。ユニークーンの足をカタパルトが大きな音を立てて固定する。

「よし、刹那もダブルオーを固定せり。整備に掛かる。」

「分かつた、後は頼む。」

ダブルオーをユニークーンの前に配置するとコクピットから下りていく。

ハロを積んだ無人機が数機ダブルオーに飛んできて修理に入る。

「やれやれ、相変わらず愛想が無いな。それよりも・・・」

イアンは回収された白い機体を見上げる。

「この角付き、詳しく調べる必要があるな。ハロ付いて来い。」

「ツノツキ、ツノツキ」

黄緑色のハロは耳をパタパタさせてイアンの後に付いて行く。

パネルを操作しハッチを開放しようとするとプロテクトが頑丈に作られており簡単には開かなかつた。

何度もパネルを操作するがどのパターンを試してもエラーが出てしまふ。

「何だこのプロテクトは？ただハッチを開けるだけだぞ！？」

ハッチに近づいてきたハロの口からケーブルを出しユニークーンに繋げる。

それでもプロテクトを破るには時間が掛かる。

刹那はイアンに整備を任せるとMSDデッキからブリッジに移動する。グリップを握り足を浮かせて向かっている途中にティエリアと会う。先ほどのティエリアらしからぬ行動に疑問を感じていた刹那はその事について聞いてみた。

「あの白い機体、何故かは分からぬがとても不愉快に感じた。」

「これでは理由に毛並まないな。書の井の事を語れない。

刹那は気にせず話を続けた。

ティエリア、あのガンダムについて何か情報は有るのか。

の解析結果を待つしかない。」

「そ、うか…」

落胆の表情を浮かべる刹那、二人で話していると小型輸送船からスマラギとライルがプトレマイオスに乗艦する。

「よおー！いやスッゲエなガンダムって。」

空気もペニペニとしており、ライルは完全に場違いだった。

「おら?」

「・・・刹那、一人の事は任せる。僕はイアンとあの角付きを調べて来る。」

ティエリアはそう言い残しグリップを掴んで行ってしまう。

「一人残る殺那はミライが近寄り詰しかけ
「アイツは驚かないんだな、俺の事。」

「・・・ブリッジまで案内する。スメラギも来てくれ。」

刹那は一人を案内しようと歩いて行く。

スメラギは顔を俯け無言で刹那に付いて行く。

「やれやれ、感動のご対面つて訳にはいかないか・・・」

刹那がブリッジのドアを開けるとクルーが迎え入れてくれた。
みんなスメラギの顔を見ると立ち上がり駆け寄る。

「スメラギさん！お帰りなさい。」

「お久しぶりです、ノリエガさん。」

「相変わらずだな。」

スメラギは暗い表情のままだった。

刹那に連れられてプロトレマイオスに来たが彼女はまだソレスタルビーニングに戻る決意を固めては居ない。

「私は・・・」

隣からライルもブリッジに入ってきた。

ライルを見ると一同に驚く。

「ロックオン・・・」

フェルトは目に涙を浮かべた、でもどうして彼がココに・・・

「ロックオン、イキテタ、ロックオン、イキテタ」

「どうゆう事だ、どうしてロックオンが！？」

「熱烈な歓迎だな。」

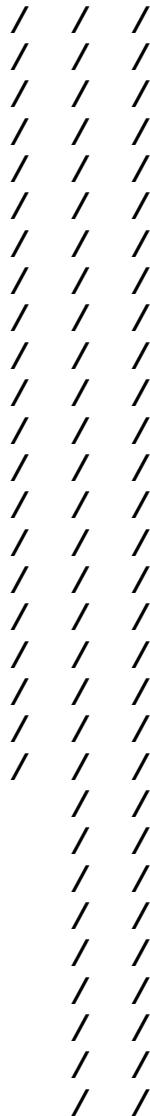
驚くクルーに事情を説明するスメラギ、でも表情は変わらない。

「弟さん、なんですって。」

「そうゆう事だからこれからようじく！」

ライルが自己紹介をしているとMSデッキのイアンから通信に入る。

「白い機体のハッチが開いたぞ！」



ハロが10分程掛かりハッチを開けた。

ハロには最新鋭の電子プログラム機能が搭載されている。にも関わらずハッチ一つ開けるのに10分も掛かるのは異常だった。それだけこの機体のプロテクトが頑丈に組まれている。

「よくやつたぞハロ。」

「アイタ、アイタ」

イアンはその事をブリッジに報告する。

「白い機体のハッチが開いたぞ！」

ノーマルスースの通信機からそう言つとハッチを潜りコクピットを覗き込む。

そこには機体と同じ白いパイロットスーツを着た少年、バナージ・リンクスが居た。

第六話 片鱗（前書き）

アドバイスがあればどんどん書き込んでくれるとうれしいです。

第六話 片鱗

「クピットを開けたイアンは中から白いパイロットスーツを着た少年を引つ張り出す。

無重力なので重さはあまり感じなかつた。

シートから体を浮かせ両腕で抱え込むとそのまま足で床を蹴りコクピットから後ろ向きに出て行く。

抱えた体を床に仰向けに寝かせヘルメットを取る、その顔は10代の様に見えた。

「こんな子供が操縦していたのか！？」

白い機体のパイロットが子供だったことに驚愕するイアン。

こんな子供が最新鋭のガンダム2機、刹那とティエリアの相手をしていたなんて。

機体の性能も然る事ながらその事に驚いていた。

ガンダムマイスターの刹那もソレスタルビーニングのメンバーになつたばかりの頃は14歳だった。

そのころはモビルスーツに乗つた事など無く、シミュレーターで訓練する日々が続いた。

刹那の専用機、ガンダムエクシアが与えられたのはそれから2年後だ。

当時の技術レベルのはるか先を行くガンダムは他のモビルスーツなど相手にならない。

それでも数で押されたり、パイロットの技量の差で窮地に立たされる事もあつた。

刹那は数多の戦いを得て今ではソレスタルビーニングを支えるガンダムマイスターになっている。

そんな彼らをこの少年はたつた一人で・・・

思う事は多くあるがイアンはこのパイロットをメティカルームへ運ぼうと体を抱えようとした。

「その少年が、この機体のパイロットなんですね。」

後ろから声が聞こえ振り向くと少年の顔を凝視するティエリアが居た。

メガネ越しに見える目はいつもより鋭いように見える。

れ
ル

ティエリアは顔をじつと見たままで返事は無い。

۷۰

「ティエリア……どうした？」

「・・・いえ。白い機体の解析はどうなりましたか?」

「からせる所だ ハ、元の口元がながなが壊れなくてな
りつやあ、手しそうだ。」

「分かりました、解析が終わつたら知らせてください。」この少年は

「ああ！ そつちも頬んだぞ。」

ティエリアは寝させていた少年の体を抱えるとメディカルルームに

向かい歩を玉した。

「！」の子供があの白い機体のパイロット・・・

MSデッキを出たティエリアは白い機体のパイロットを抱えて歩いて行く。

少年は目を閉じたまま意識がない。

そんな彼を見ていると自分の心の中を見透かされていくような感覚に陥ってしまい不愉快だった。

とは言えあの機体を回収すると言ったのは自分で、無抵抗な人間をこのままにもしておけずイアンの指示に従っていた。

艦内を進んでいるとスメラギが一人立ち尽くしていた。

まだソレスタークビーニングの制服に袖は通していない。

人を抱えて進んでおり目立つ筈なのに彼女はこちらを見なかつた。

ティエリアはそのままスメラギに近寄り話しかけた。

「こんな所でどうしたんですか？」

「ティエリア……」

ゆっくりと振り向くがすぐに下を向いてしまつ。

今の彼女に4年前の面影は無かつた。

「その様子だと、まだ決心は付いていないようですね。」

「それは……」

「これからアロウズと戦つていくにはあなたの戦術予報が必要になる。」

「それでも！……もう、私は……」

「・・・そうですか。では、僕はこれで失礼します。彼を連れて行かないといけないので。」

ティエリアの彼と言う言葉を聞いてスメラギはやつと気づく。

白いパイロットスーツを着た少年がティエリアに抱えられている事を。

「つ！？何なの……！」

その少年を見ると不思議な感覚に包まれた。

艦内に居る筈なのに一瞬宇宙が見えた。

きつと疲れているんだと、目を閉じ頭を振つた。

「どうしました？」

「ええ、何でもないわ。その子はどうしたの？」

「先ほど遭遇したアンノウンの「クピットの入つていきました。おそらくパイロットと思われます。意識が戻らないので今からメディカルルームに連れて行く所です。」

「アンノウン？」

「アロウズとの戦闘後に突然襲い掛かってきた謎の白い機体です。今は解析中で詳しい事はまだ分かりません。このパイロットの意識が戻り次第尋問を行います。」

「尋問つて・・・まだ子供なのよ。」

「あのモビルスーツは危険です。ですがこちラで使用出来れば強力な兵器になります。そのためにも、そのパイロットから話を聞かなればなりません。それに4年前の刹那もこのパイロットと同じ年代です。子供といえど厳重な警戒が必要です。」

ティエリアの言う事に何も言い返せない。もつ自分には関係ないと、割り切るしか無かった。

「では、僕はこれで。新しく来たマイスターの訓練もありますので。」

「それだけ言うと少年を抱えて立ち去ってしまった。」

スメラギはティエリアの姿が見えなくなると自室に戻った。
扉のロックを解除し部屋に入ると明かりも付けずにベッドに倒れこんだ。

第六話 上鱗（後書き）

「メンツお待ちしておつます。

第七話 救出作戦（前書き）

コメント、アドバイス等お待ちしております。
たくさん書き込んでいただけるとモチベーションが上がるのうれ
しいです。

第七話 救出作戦

バナージ・リンクスは原因不明の病で今だに目を覚まさないで居た。

ブトレマイオスはラグランジュ1資源衛星郡で整備を受けていた。損傷したセラヴィーを直すと共に新しくメンバーになつたライル・ディランディの訓練とアンノウン機を詳しく解析する必要があつた。

特にアンノウン機は何も情報が掴めないで居た。機体データを観覧するためにはさらに厳重なプロジェクトを解除する必要があった。

イアンはブトレマイオスに装備されていいるすべての設備を駆使してプロジェクトを解除しようと試みたが解除は出来なかつた。

強引にテークを引き出そうともしたがアロテクトに察知されると全データを削除されるように構成されておりそれも無理だった。

ラグランジュコード機本のデータ採取に構造や表題の材質等も詳しく、解除していくしかなかつた。

調べるつもりでいる。

白亜の機体の謎は深まるばかりだった。

ライルは緑色のパイロットスーツに着替えてティエリアとMSDツ

キに向かつた。

新型のケルディムガンダムがロールアウトされたばかりだ。ティエリアはコクピットのパネルを操作するとハッチを開けてライ

ルを乗り込ませた。

「これがキミのガンダムだ。」

「へえ、やっぱスゲエな。」

「これはキミの専用機だ。これから訓練で操縦法を覚えてもらおう。」

「お手柔らかに頼むよ。」

「モビルスーツの戦闘経験は?」

「あるわけないだろ。作業用のワークローダーに乗つたぐらいだ。」

「まったくの素人を連れてきたのか、刹那め!」

「だからさ、やることいっぱいあるだろ。よろしく頼むよ、かわいい教官殿。」

「茶化さないでほしい。」

ライルはコクピットから手を伸ばし握手を求めるが無視された。見た目は同じでもニール・ディランディ、ロックオンとは違う。その様子をフェルトは画面越しに見ていた。

ロックオンが死んでしまった事をもう一度直視することとなつてしまつ。

「ロックオン・・・」

静かに呴くとパネルを押してライルの映つている画面を消した。

沙滋・クロスロードはプトレマイオスの収容所に入れられている。刹那に連邦軍の強制労働から逃がしてもらい状況に流されてここまで来てしまつた。

もうここに居る以上は戦争に加担している事になるのだろうか。4年前の事故から会えていないルイスはどうしているだろ?。

思う事は沢山あつたが今は自分の出来る事をしようと考えていた。食事を運んできてくれた時に一緒に渡された赤いボールのような口ボット、ハロを使いこの艦のデータバンクを調べていた。

調べるのは4年前のあの事件だ。

ソレスタークビーイングは武力介入で戦争を無くすと宣言していたの

に無関係なルイスの家族や一般人に襲撃した。

そのせいで両親は死にルイスは左手を無くした。

ハロの口らしき部分からケーブルを引っ張り出し収容所の設置されているコンピューターに繋げる。

データバンクから4年前の出来事をしらみつぶしに探した。もう何時間と時間が経過した時に気になるデータがあった。

「スローネによる民間人の襲撃・・・？」

パネルをタッチしデータを閲覧する沙滋。すると突然部屋のロックが解除され扉が開いた。

「刹那！？」

「食事だ。」

一言そう言うと奥からトレーを持つてきた。

沙滋はソレを受け取ると食事には手を付けずに床に置いた。

「どうした？」

「・・・刹那、一つ聞きたい事があるんだ。」

閲覧していたデータを刹那に見せ真実を聞き出そうとした。

刹那は差し出されたコンピューターの画面を見ると言葉を発した。

「確かに記録にあるように俺達とスローネは別の立場で武力介入を行っていた。」

「仲間じゃないと。」

「ああ」

「それでもキミ達は同じようにガンダムで人を殺し、僕と同じ境遇の人を作ったんだ。キミ達は憎まれて当たり前の事をしたんだ。」

「・・・分かつている。」

「世界は平和だったのに・・・当たり前の日々が続くはずだったのに・・・そんな僕の平和を壊したのはキミ達だ！」

「自分で平和ならソレでいいのか？」

「そうじゃない、でも誰だって不幸になりたくないさ。」「不幸か・・・ならコイツはどう思っているんだろうな？」

沙滋は扉の奥を覗き込んだ。

そこにはタンカーに寝かされた少年が居た。

「それは……？」

「体には異常は無いのに意識が回復しない。原因は不明だ。」

「アーニーがなして、そのトキビでいるのがいい。」

「コイツはモビルスーツに乗つて俺達に戦闘を仕掛けてきた。一人

にして置く訳にはいかない。沙滋、お前が見ていてくれ。

刹那はその少年の体を抱えると収容所のベットに寝かせた。

一 ちよこと待て
殺那！」

何かあれば連絡してくれ。すぐにケルーが駆けつける。

「お方には語り難い。」
老翁は済済の清正を聞かでて口に出す。行方

まつ。

「そんな事語つたって……」

落胆して床に座り込んでしまう。

卷之三

虚ろな目で少年がこちらを見てくる。

「王留美からの暗号通信です。反政府勢力収監施設、アレルヤ・ハ
ブティーズムを発見！」

「 知ってるです。その人、マイスターさんです。」

「さうか、通井は捕まっていたのか、道理で行方が分からぬし詫た

4年前の戦闘でキュリオスは敵に捕獲されてしまい、そのままパイロットであるアレルヤは捕まってしまった。

今までも捜索はしていたが戦力も整つておらず危険な行動は出来なかつた。

それでもいつか奪還する事を信じて彼の新しいガンダムも製造してある。

アレルヤを奪還する為にブリーフィングルームでミーティングを開く。

ブトレマイオスの全クルーを呼び出した。

みんなが制服を着て集まつてくる中スマラギだけが胸元のはだけたシャツで來た。

「アレルヤが見つかつたって本当なの？」

「ああ、王留美からの確定情報だ。これから救出作戦を始める。」

「救出つて、どうやつて？」

イアンの言葉を理解出来ないでいた。

「アンタに考えて欲しい、スマラギ・李・ノリエガ。俺達に戦術予報をくれ。」

刹那は前に出てスマラギを説得するが彼女はまだソレスタークリビーンに戻る気は無かつた。

「アレルヤが戻ればガンダム4機による作戦行動が可能になる。」

「それでも心許無いがな。」

ライルが刹那の言葉に水を刺す。

隣に居てそれを聞いたティエリアが彼を睨み付けた。

「おおつと！？」

さすがに場の空氣を察してこれ以上は言わなかつた。
目線を反らし黙つて成り行きを見守つた。

「スマラギさん。」

「コレは・・・」

フェルトはスマラギに制服を手渡そうとする。でも彼女は受け取らなかつた。

「やめてよ、そいやつて期待を押し付けないで。私の予報なんて何も変える事が出来ない。みんなを危険に晒すだけよ。」

スメラギは背を向けてブリーフィングルームから出て行こうとする。

昔も、4年前も何も変える事が出来なかつた。今回だつて・・・

「後悔なんてしない！たとえミッションに失敗しようとアンタのせいになんてしない。俺達はどんな事をしてでもアレルヤを、仲間を助けたいんだ。頼む、俺達に戦術をくれ。」

「・・・フェルト、後で現状の戦力と状況のデータを教えてくれる。」

「スメラギさん！」

スメラギは振り向く事なくそのままブリーフィングルームを出て行つた。

第八話 引かれる魂（前書き）

スミマセン、あまりストーリーが進んでいません。

第八話 引かれる魂

ブトレマイオスはアレルヤの救出の為資源衛星から発進する。ガンダムマイスターはパイロットスーツに着替え各自のモビルスースに向かう。

王留美からの情報は正確でアレルヤの収監されている場所が提示されていた。

「すごい！ 収容されている人達の名前や場所が正確に記されている。

「フェルトはデータを見てアザディスタン王国の皇女マリナ・イスマイールの名前がある事に気づいた。

「この人・・・」

王留美の情報を元にスメラギはミッションプランを考えていた。データを睨み付ける様にくまなくチェックする。

「この空母の粒子ビームを押さえられれば。」

だがスメラギは収容施設の襲撃作戦以上に気になる事があった。パネルに触るとライル・ディランディのプロフィールが画面に映し出される。

「彼のこの能力値の高さ、いつたいどう言う事？」

ただの一般人にしては銃火器の扱いやモビルスーツの適正が高かった。

普通ではこの様には成らない。

気にはなるが今は一人でも戦力が必要な時だ。

彼の能力値を信じてプランを組み立てるしかない。

パイロットスーツに着替えたロックオンとティエリアがグリップを握り移動する。

「ついに実戦だな。」

「キミに出番があるとは思えない。」

ティエリアが先頭に立ちMSデッキへ向かう。

その表情はいつもと変わらず冷めていた。

後ろに居るせいで顔は見えないがロックオンは容易にその表情が想像できた。

それを想像し鼻で笑つた。

「そいつは気が楽だ、頼りにしてるぜ。」

「・・・」

無言でティエリアはデッキのセラヴィーに取り付く。
ハッチを開放しコクピットに乗り込み脚部をカタパルトに固定される。

「セラヴィー、専用バズーカ装備です。」

通信が入るとバズーカを掴んだアームが前方にやつてきた。

機体の両腕を前に出しGNバズーカを装備する。

刹那のダブルオーは発進直前までイアンが調整していた。

「ツインドライブ、起動したはいいが安定には程遠い。トランザムを使うなよ。」

青いパイロットスーツを着た刹那にそう告げる。

「了解、サポートを頼む。」

ヘルメットを被りダブルオーのコクピットに乗り込む刹那。

シートに座るとスマラギからミッションプランが送られてきた。

「300秒で施設を襲撃、混乱に乘じてアレルヤを救出。」

他のマイスター達にもミッションプランは送られている。

ソレを見たティエリアは鼻で笑つた。たつた3機では無謀もいい所である。

「それでこそスマラギ・李・ノリエガ」

ライルも一様ケルディムのコクピットで待機していた。

しかし作戦前だと違うのに緊張感は無くいつもの調子でミッションの内容を見た。

「アレ?俺にもやる事あんの!?まあ、そっちの方が都合がいいか。

「ナンノコト、ナンノコト」

「何でも無いよ。サポート頼むよ、ハロさんみー！」

「クピットに居るオレンジ色のハロを叩く。

各機力タパルトに固定されいつでも発進出来る体制に入る。

そんな中ティエリアは刹那に通信を入れる。

「刹那、アレルヤが収監されている場所にこんな名前が。」

ティエリアは刹那の機体に王留美から送られたデータを送った。データにはマリナ・イスマイールと書かれていた。

「マリナ・イスマイールがアレルヤと同じ施設に居る！？」

刹那は悩む素振りを見せたがすぐにデータを閉じた。

するとプトレマイオスは大気圏突入の体勢に入る。

「GNフィールド最大展開、大気圏突入を開始します。」

フェルトがプトレマイオスの全クルーに通信で伝えるとパネルを作しGNフィールドを展開する。

GNフィールドを開いたプトレマイオスが大気圏に突入して行く。

大気の摩擦が艦を包み赤くなる。

熱を防ぎながらプトレマイオスはアレルヤの囚われている連邦軍の収容施設に向かう。

揺れる艦内で沙滋はベッドにしがみ付き体を支えている。

「くうううつ！この振動は！？重力？」

体を支える事で精一杯の沙滋は隣のベッドのバナージにまでは目が行かなかつた。

ベッドで眠っているバナージは地球に向かう最中人々の魂を感じ取つていた。

そうして彼も重力に魂を引かれて落ちていく。

「オード・・・リー・・・・」

バナージの微かな声に沙滋は気づけなかつた。

//////////

連邦軍の収容施設は宇宙から降下して来るフューレマイオスをすぐに察知した。

司令官であるカティ・マネキンはすぐさま掲示を出す。

一
砲撃用意、モビルスーシ隊の発進準備急げ！」

「ペーリス中尉、敵襲だ。E-57の確保を。」
部下に指示を出すとソーマ・ペーリスに直接通信を繋げる。

「了解。」

それだけ言うと通信を切ってしまった

દુ

だが突然歩くのを止め周囲を警戒しだした。

「何だ!?」この変な感覚は……あの男ではない。

まとわり付くような不思議な感覚を感じた。

上がる。

「ガンダム・・・！」

ソレスタルビーイングの目的は非検体E-57の救出、そのまえに確保しなければ。

ピーリスは収容所

嫌な感覚はいつそう強くなつてくる。

第九話 本格始動（前書き）

コメント、アドバイスお待ちしております。

第九話 本格始動

ブトレマイオスはGNフィールドを展開したまま連邦軍の収容施設に一気に降下する。

連邦軍の空母から主砲の一斉射が飛んで来るが減速せずにそのまま突っ切る。

「減速しないだと!?」

カティ・マネキンはブトレマイオスの行動に驚く。

通常ビームを回避しようと艦を旋回させるはずである。

彼女はその行動の意味をすぐに察知した。

「まさか!? 施設の防衛部隊を退避させりー。」

そう叫ぶがもう遅かった。

「GNフィールド最大展開、トレマー潜水モード。」

フェルトがGN粒子の濃度を調整するとラッセはさうにスピードを上げる。

「海に突っ込む!」

ブトレマイオスはそのまま急角度で海に飛び込んだ。

大きく水しぶきが舞い津波が発生する。

発生した津波は勢いを増し施設の防波堤を軽々超えてくる。

防衛の為に待機していたモビルスーツの脚部が海水に飲み込まれる。

そのままモビルスーツはバランスを崩して倒れてしまう。

津波はそれだけでは收まらず建造物の足場に勢い付いた海水が当たり施設全体に霧が霧に包まれる。

霧のせいでGN粒子が拡散してしまいビームの威力が下がる。

それに気付いたカティ・マネキンはミサイルで迎撃するよう指示を出す。

海中に居るブトレマイオスにミサイルが直撃するがGNフィールドにより装甲にダメージは無かつた。

霧が施設を被つていいのわずかな間にプトレマイオスからガンダムが3機出撃する。

「刹那、ティエリア、粒子ビームの拡散時間は300秒しかないわ。その間にアレルヤを。」

フェルトは施設のモビルスーツ部隊の動きを察知しながら刹那達にその情報を送る。

「了解、180秒で終わらせる。」

「残りの120秒でもう一人助けたらどうだ?」

「・・・マリナ」

そう言うとダブルオーとセラヴィーは施設に乗り込む。残ったモビルスーツとトーチカからの砲撃を高い機動性で掻い潜る。一撃も被弾する事無く指定された座標に一直線に突っ込む。刹那は建造物にダブルオーをめり込むように突っ込んだ。

その影響で大きな振動が周囲に伝わる。

アレルヤの奪還を阻止するべく向かっていたソーマ・ピーリスは振動で足場を崩し壁にぶつかってしまう。

「くううつ！この振動は！？」

刹那はハツチを開放し施設内部に侵入する。

作戦終了まで時間は残されていない。施設の構造を覚えアレルヤの囚われている場所まで走る。

ティエリアはセラヴィーのGNフィールドを展開し無防備なダブルオーを守る。

ソレスタルビーイングの出現にともないアロウズのモビルスーツも出撃し迎撃行動に入つた。

GN-X部隊が侵入したダブルオーにビームを撃つがセラヴィーのGNフィールドが寄せ付けない。

「ここは死守する！」

高濃度のGN粒子のフィールドを通常のビーム兵器では打ち破る事は出来ない。

「何て粒子量だ！？」

「接近して直接叩く！」

フィールドを打ち破れないと見たら迅速な判断で接近戦闘に切り替える。

各機がビームサーベルやランスに持ち替え再度攻撃をしかけた。機動性でかく乱しながら時間差で攻撃するべく連携を取りながら縦横無尽に動く。

だが突如としてレーダーの範囲外からビームが飛んで来る。正確な射撃でGN-Xの1機がコクピットを撃ち抜かれる。

「何だ！？別方向からの攻撃！？」

想定外の襲撃にアロウズの部隊はすぐに対応出来ないで居た。ケルディムの「クピットのスコープを覗き見ながらライルは次の機体に照準を合わせる。

「タオシタ、タオシタ」

「まぐれ、まぐれ。ロックオン・ストラトス、狙い打つぜ！」

GNスナイパーライフルの長距離射撃で敵機をかく乱させる。

アロウズの部隊はケルディムの攻撃に成す術が無い。

セラヴィーのGNフィールドも打ち破る事が出来ずじわじわと押され始めていた。

内部に潜入した刹那はアレルヤの収容されている場所を突き止めた。奇襲により敵兵はおらずスマーズに作戦は進む事が出来た。

ロックされている扉に爆弾をセットし爆発させる。

扉は吹っ飛び真っ暗な部屋の中に光りが差し込む。

そこには情報どうり拘束されているアレルヤが居た。

刹那は銃を構え手足を固定させている拘束具を破壊する。

「刹那、どうして・・・」

何も言わずに通信機を投げ渡した。

「そのポイントへ行け。アリオスが来る。」

「アリオス？」

「お前のガンダムだ！」

それだけ言つと刹那は部屋を後にした。

「アレルヤを発見した。アリオスを頼む。」

「了解、トレミー浮上。」

「アリオス射出です！」

刹那就からの連絡を受けラッセはブトレマイオスを海上に浮上をせる。

カタパルトに固定させたアリオスを射出させ再び海に潜る。

刹那はマリナ・イスマイールの収容されている場所に向かつ。

その姿を見てアレルヤもすぐに動き出す。

動きにくい拘束衣で指定座標に走り出す。

通信機には内部の構造も載つており指定ポイントには迷う事無く行くことが出来た。

「エリが指定ポイントか・・・」

しばらくするとブトレマイオスから射出されたアリオスが建造物に突っ込んできた。

射出は正確で自分の目の前には「クピットのハッチを開けた新型のガンダムが居た。

乗り込もうとガンダムに向かう。

「動くな！」

背後には銃を構えたソーマ・ピーリスが居た。

「マリー！」

「私はそんな名前では無い！」

「・・・いや、これがキミの本当の名前なんだ。マリー・パー

アシー」

「マリー・パー・ファシー・・・」

その名前を聞くと脳に昔の記憶が蘇る。

だが今の彼女は超兵としての記憶しか残つておらずそれはとても不愉快だった。

体が、心がその記憶を拒絶する。

「マリー！」

苦しみだす彼女を助けようとするが足元に銃弾が飛んできた。

ソーマ・ペーリスは握った銃をアレルヤに撃ちまくる。

たが照準はやたらまじでおひすあひぬ方向に飛んで

それでも銃を握っている今の彼女に近づくのは危険と感じたアレルヤはアリオスの「クピットに乗り込む。GNドライブを起動させるとメインカメラからの映像が「クピットに映し出される。

苦しそうにもがく彼女が映像に映っていた。

すぐ傍にいるのに助ける事の出来ない事がアレルヤは悔しかった。

「マリー、必ず向かえに来るから、必ず！」

刹那もマリナを救出してダブルオーに乗り込む。

「脱出する、掘まつていろ。」

のN。

一方そのころカタロンによる収容者の救出も行われていた。

ソレハタルヒヘンクの襲撃は、ソリ消音していふ形容放語て、少人を多く逃がす事が出来た。

だがその中にマリナ・イスマイールは居なかつた。

ブトレマイオスに帰艦した4人は各自で休息を取っていた。

アレルヤは拘束衣を脱ぎティエリアと一緒に居た。

「アレルヤ、どうして連邦政府に拘まつていた？超人機関の情報を」

「いや～すゞいな」の艦は、水中航行すら可能とは。

ロックオンの姿を見て目を見開くアレルヤ。

「ロックオン！どうして・・・」

「そのリアクション飽きたよ。」

「彼はロックオンではない。弟だ。」

「す、すまない。」

「変わらないな、キミは。」

「そうかい・・・うつ！？」

突然頭を押さえて苦しそうな顔をする。

「こ」の感覚はハレルヤ・・・いや、違う。」

「静かになつた。もう戦闘は終わつたのかな？」

「セイコウ、セイコウ」

沙滋は艦の揺れがおさまった事に安心した。

ベッドに寝ている少年を見るが以前として状態は変わっていない様に見える。

「病気か・・・ルイスは大丈夫かな・・・」

地球上に居る彼女の事を思い出していると突然少年が目を開けた。

「こ」、ここは・・・

「つー？気が付いたのか！」

いきなりの事で沙滋も驚く。

すぐに通信でクルーに連絡を取る。

バナージはゆっくりと息を吸つた。

第十話 対話（前書き）

「メント、アドバイスお待ちしております。
良ことも悪いことも一杯書き込んで貰うといいです。

第十話 対話

アレルヤの救出作戦から数分後、沙滋からの連絡で眠つたままだった少年の意識が戻った事を知る。

フェルトからの報告を受けクルー全員が一度ブリッジに集合した。
「アンノウン機のパイロットの意識が戻つたようです。」

「本当か！？」

その報告に驚くクルー達だがティエリアは冷静だった。

意識が戻つた今、謎の白い機体について聞き出さなければならぬ。あの戦闘能力は利用価値がある。

それにはあのパイロットの身元も特定しなければならない。
もしも敵であつた場合は・・・

一人無言でブリッジから立ち去ろうとする。

「待つて、ティエリア。」

「スマラギさん、どうしました？」

「私も行くわ。」

「でもアナタはまだ戻ると決めた訳では・・・」

「何となくだけど、あの子と話せば何か分かる気がするの。」

「あの少年は、まだ名前すら分かつていないんですよ。何の根拠があつてそんな事を。」

「私もよく分からないわ。でも、決心が付きそうなの。」

彼女は真っ直ぐな瞳でティエリアを見た。

その瞳は酒に溺れていた以前とは違う。4年前の時と同じ。いや、それ以上の意思を感じた。

「・・・分かりました。ただし、尋問の手は子供だからと言つて緩める気はありません。」

「それは分かつていいわ。」

「では、行きましょう。」

話が終わり二人は沙滋と一緒に居る少年に会いに行く。

二人が出て行きブリッジの自動ドアが閉じる。

「スメラギさん、戻つてきてくれるんですね！」

「らしいな、これで作戦行動もやり易くなる。」

「感激ですかう！」

二人は沙滋の居る収容所に向かい歩いた。

収容所に付くまでは二人は何一つ言葉を交わさなかつた。

「ここです。ロックを解除します。」

「ええ、お願ひ。」

ティエリアが扉に付いているパネルを操作しロックを解除するパスワードを入力する。

数秒でパスワードの入力は終わりロックが解除されると扉も開いた。中に入ると目を覚ました少年がベッドに座り沙滋と何か話していた。白いパイロットスーツはもう着ていない。

ティエリアとスメラギが来た事で沙滋は少し戸惑つているようだつた。

「ちょっと、いきなり！」

「目は覚めたようだな。」

「アナタは・・・」

「一緒に来てもらつ。キミには聞きたい事が山ほどある。」

「拒否権は、無いんですね。」

「そうだ。」

「・・・分かりました。」

バナージは今までの経験で抵抗した所で変わらないと分かつっていた。

相手はコチラの情報を欲している。

元は唯の一般人が軍人からの尋問に耐えられる訳がない。
なら今は素直に従つしかなかつた。

バナージがベッドから立ち上ると二人は部屋から出た。

ティエリアとスメラギの後に続きバナージも部屋から出で一人に付いて行く。

沙滋は一人部屋に取り残されてしまうと扉のロックが掛かる。バナージは別の部屋に連れて行かれるときイスに座らされた。

部屋の内装は白色で統一されており尋問するには不向きに思えた。（それにしても「ココは何処なんだ？ジオンじゃない、連邦軍にも思えない。）

するともう一人の女の人が向かいのイスに座ってきた。

紫色の服を着た男は部屋の隅に立つてコチラを睨んでいる。

「意識が戻ったばかりで悪いのだけれど、私の質問に答えてもらわね。」

「抵抗しても無駄なんですよ。」

「そうね、だから正直に答えてちょうだい。そりいえばまだ名前を聞いていいなかつたわね。」

「バナージ・リンクスです。インダストリアルフのフ8番街に居ました。」

「名前だけでよかつたんだけど、まあいいわ。私はスメラギ・李・ノリエガ」

「本名じゃ無いんですね。」

「悪いけど教える事は出来ないわ。」

今まで連邦とジオンを行き来している内に軍隊の本質を自然と覚えてしまつた。

この後に聞かれる事を想像し無意識に聞かれていない事も答えてしまつた。

「あの白いモビルスーツは何？軍のデータベースにはあの機体のデータは記載されていなかつたわ。」

やはりその事かと思つた。

ユニークーンの事はごく一部の人間しかその存在を知らない。

希少価値の高いサイコフレームを使つているアノ機体を見逃してくれるはずがない。

そう考えていたら思いもよらない事を彼女は言つた。

「今のモビルスーツにはGNドライブが標準装備されているのにあ

の機体には無かつた。なのにガンダムと対等に戦っていたわね。」

GNドライブ、初めて聞く単語にすぐには理解出来ない。それにガンダムと戦闘とは何の事だろうか。

「ちょっと待つてください。俺は一体何をしていたんですか？ ガンダムと戦つていたなんて・・・」

「意識が戻つてすぐだから状況が理解出来ないの？」

「多分そうだと思います。」

スマラギは真つ直ぐにバナージの瞳を見つめた。

張り詰めた空気が部屋に漂う。

「・・・いいわ、順を追つて説明するわね。私達ソレスターイ・イ・ングは連邦軍のアロウズと戦闘になつた。アロウズのモビルスーツ部隊をソレスターイ・イ・ングが所有するガンダムで撃退した所にバナージ君の乗つていた白い機体がコチラに攻撃を仕掛けてきたの。それを鹵獲してアナタはトレニー、この艦に居るつて訳。理解してもらえたかしら？」

スマラギの説明を聞いても頭の中はまだ混乱したまま。むしろ悪くなつたと言つてもいい。

また聞いた事のない単語が出てきた。

ソレスターイ・イ・ング、アロウズ、どちらも今までに聞いたことも無ければ見た事も無い。

ただ連邦軍とガンダム、この二つはバナージもよく知っている。「俺が戦つていたて言うガンダムってバンシイ、黒いガンダムですか？」

フル・フロンタルの搭乗するシナンジュを倒す為リディ少尉の乗る2号機であるガンダムバンシイと一緒に戦つた。バナージが知る限りガンダムはヨニコーンとバンシイの2機しか無いはずだ。

しかし返ってきた答えは違つていた。

「いいえ、色は黒くは無いわ。アナタが戦闘したガンダムはどちらも白色よ。後、さつき言ったバンシイって一体何？」

バンシイの事を聞かれしまつたと焦る、だがバナージもバンシイについてあまり情報が無い。

「うまくごまかす方法もすぐには思いつかず正直に答える他無かつた。」
「バンシイはヨニコーンの2号機です。バンシイにもヨニコーンと同じサイコフレームが搭載されています。それ以外は俺にも詳しくは分かりません。」

「ヨニコーンって言つのはアナタの乗つっていた白いモビルスーツの事?」

「そうです。」

「あとサイコフレームって言つていたわね。それは一体何なの?」「サイコフレームはコンピューター・チップを金属粒子レベルで鋳込んで作ったモビルスーツ用の構造部材と聞いています。でも作つた人もサイコフレームについてよく分かつていなつて聞きました。」

「それじゃあアナタは何も知らずにあのモビルスーツに乗つっていたの?」

「そう言つ事になります。」

「・・・まあいいわ。アナタの機体はコチラでも解析していますから。それじゃあ次ね。あの機体は誰が作つたの? ガンダムと対等に戦つたあの性能は普通では考えられないわ。」

「ヨニコーンは父から託されたんです。」

「お父さんから?」

「はい、それで略奪されるのを防ぐために俺の生体データを登録して。だからヨニコーンは俺以外は動かせないようになつています。」

「それで、アナタのお父さんは何処でその機体を?」

「それも分かりません。ヨニコーンがある事自体知らなかつたんです。パイロットになつたのだつて・・・」

スメラギは話を聞いていてこの少年は敵ではない事はわかつた。だがこの少年もアノ白い機体、ヨニコーンについては深くは知らないらしい。

これ以上尋問しても情報は出てこないと判断して席から立ち上がる。「大体の事は分かったわ。でも、しばらぐせこの艦に居てもらいなす。」

「それは分かっています。」

「そう、それじゃあ質問はもう終わり。わざと居た部屋に戻つてもいいわ。」

スメラギはバナージを安心させようと優しく言つと船艤の隅に立つているティエリアに近寄つた。

「ティエリア、バナージ君を案内して上げて。もう扉のロックは掛けなくてもいいから。」

「彼を信用するのですか。」

「そこまでじやないけど、私達に危害を加えるような事は無いわ。」

「アナタがそう言つのなら構いません。後は僕が案内します。」

「それじゃ、お願ひね。」

ティエリアに後の事を任せるとスメラギは部屋から出て行つた。

部屋に残つたバナージを見てティエリアも動く。

「いつまでそこに座つている。行くぞ。」

「はっはい！」

バナージは急いで立ち上がり部屋から出て行くティエリアに付いて行く。

先に進むティエリアに誘導されながら沙滋の居る部屋に向かい歩く。部屋に着くまでは終始無言だった。

「付いたぞ、この部屋だ。スメラギさんの指示で、もう部屋にロックは掛けない。中に居る沙滋・クロスロードにも伝えてくれ。」

「分かりました。」

「それと一つ聞きたい事がある。」

「何ですか？」

「お前は何者だ。」

「・・・どう言つ事ですか。」

バナージの言つ事には答えず真っ直ぐに睨むティエリア。

臆せずにバージもティエリアを見た。

すると鼻で笑いティエリアは背を向けて歩き出した。

「何でもない、気にするな。」

「・・・」

立ち去るティエリアを見るとバージは沙滋の居る部屋に入った。

第十一話 謎を残して（前書き）

もうすぐ「ヒーロー」「ローン」が活躍する戦闘シーンに行けそうですが、しばしお待ちを。

第十一話 謎を残して

尋問が終わったバナージが沙滋の居る部屋に戻ってきた。突然の事に戸惑っていた沙滋が無事に戻ってきたバナージを見て安堵する。

「よかつた、なんとも無かつたんだね。」

「少し質問されたぐらいですよ。」

「でも僕の時は何も無かつたのにどうしてキミだけ？」

刹那の計らいで何もされる事なく保護されているが沙滋はその事を知らない。

それにバナージは所属不明のモビルスースに乗りソレスタルビーリングに攻撃を仕掛けてきた。

その彼を沙滋と同じようにただ保護する訳には行かない。

その事を言うべきか躊躇するがいずれはわかる事だった。

「それは・・・それは、俺がモビルスースに乗っていたから。」

バナージは正直に告白した、その事に驚きを隠せない沙滋はバナージの両肩を掴んだ。

「どうしてキミまでそんな事を？何で？罪の無い人が一杯死ぬんだぞ！」

「俺だつて人殺しがしたくて乗っている訳じゃありません。でもユニコーンは父さんに託された最後の想いなんだ。」

「想い・・・その為にキミは戦っているのかい？」

「父さんのユニコーンには今までに出会った人達の想いが詰まっているんだ。オーデリを守る為にも俺はユニコーンに乗る。」

「オーデリって人はキミの大切な人なのか？」

「そうです！」

バナージは自信を持つて答えた。そんな彼を見て沙滋はルイスを思い出す。

4年前の時ルイスに何もしてやることが出来なかつた。

そして今も何も出来ないでいる。

状況に流されるだけで何も出来ない自分が酷く嘆かわしく感じられた。

かと言つてソレスタイルビーアイングに加担して戦おうとも思えない。僕はどうすればいいんだ・・・

今は沙滋の声を聞いてくれる人もおらず、答えも分からぬままだつた。

「大丈夫ですよ、彼女も想つています。」

「え・・・」

「それに自分に出来る最大限の事をすればいいんです。そうすれば他の人に利用なんてされません。」

不思議な感覚だつた、まるで考へている事が分かつてゐるような言葉だ。

「どうしてキミがそんな事を・・・？」

「いえ、そう感じただけです。それよりも一つ頼みたい事があるんですね。」

「あ・・・ああ、なんだい？僕に出来る事なんて少ないけどね。」

「そのコンピューターを使わせて欲しいんです。気になる事があつて。」

バナージが指差す先にはケーブルでハロと繋がつてゐるコンピュー
タがあつた。

スマラギとティエリアにバナージが連れて行かれて一人になつてい
る間に使つていた物だ。

「それはこの艦のなんだ。だから自由に使つてもいいよ。」

「じゃあ使わせてもらいます。」

そう言うとバナージは床に座り込みコンピューターを操作しはじめ
た。

沙滋はさつき感じた不思議な感覚が何かを考えていた。

//////////

アレルヤを救出する為に連邦軍の収容施設を襲撃した事は瞬く間に世界中に伝わった。

カンタムが現れた事でソレスタイルヒーリングが復活した事を世に知らしめた。

連邦軍はソレスタルヒーリングが再び武力介入を始めた事を逆手に取りアロウズの権限の拡大を謀った。

今世界中で報道され、ついでソーラーパネルも来るへんやうに、
向けて準備を始める。

リスベスルはその方達を見て母國であるカナダへハシの現状が気になつていた。

口ウズに狙われる身であつた。

不安になるマリナ、プトレマイオスに収容されてからその事ばかり考えていた。

すると部屋と廊が開いた。そこには糸那が立っていた。

「殺那……そんじてはまだ見てくれたお祓を書いてながこたね
ね。本当にありがとうございます。」

「そんな事は無いわ、それに5年前の」

あの行為はとてもすばらしい物だと私は感じます。」

マリナの言葉を聞いても殺那は無表情で、そんな彼をマリナは優しく見ていた。

「そんな事はいい、これからやり直すつもりだ。」

「アザデイスタンに戻ります。」

「駄目だ、保安局が来る。それにマリナを口実に連邦が介入してくる可能性もある。」

「連邦に加盟しなかつたアザデイスタンは世界から見放され経済も破綻している、国民は飢えに苦しみ、改革派との争いも泥沼とかしている。でも、だからこそ私は・・・」

「マリナの考えている事も理解している。でも艦の進路を変える事は出来ない。」

「もう・・・」めんなさい、無理を言つてしまつて。」

刹那に否定され落胆するマリナ、そんな彼女を見ても刹那の表情は変わらない。

マリナを一人残し部屋を後にして歩き出す。

だが扉を開けて出て行こうとした所で歩みを止めマリナに振り返った。

「トレミーはこのまま反政府組織カタロンの基地に行く。降りる準備をしておけ。」

「何で私まで・・・」

「お前に会いたがっている人がいる。」

そう言うと部屋から出て行つた。

閉じられた部屋の中で自分の元を去つていったかつての親友を思い出す。

今まで不安や心配事しか頭の中に無かつたのが一筋の光が見え始めた。

「トレミーはカタロンの基地を指し敵に見つかれば海中を進んでいく。」

第十一話 謎を残して（後書き）

アドバイス、感想お待ちしております。

第十一話 それぞれの想い（前書き）

スミマセン、次回「モードローン」の戦闘シーンを書きたいと思いま
す。

第十一話 それぞれの想い

ルブアルカリ砂漠、ここに反政府組織カタロンの基地がある。

砂漠に地下道を作り3年あまりの歳月をかけ基地と言えるまで大きくなした。

通常なら連邦軍が見逃すはずは無いがGN粒子散布装置のおかげで見つからないで居た。

連邦軍が非加盟国に対する経済活動を麻痺させるために設置されているこの装置で今まで連邦に見つかずに来れた。

そこへプトレマイオスは向かっている。

砂漠には大量のGN粒子が散布されており敵機の反応をレーダーで捕らえる事は出来ない。

その為発見される可能性は低くなるが敵の奇襲がないとも限らない。スマラギはプトレマイオスの光学迷彩展開機能を使い砂漠の中の艦を隠しガンダム2機と輸送艦で基地に行くことにした。
輸送艦にはスマラギ、マリナ、沙滋、刹那の四人が搭乗しケルティムとセラヴィーが小型船の防衛に付いた。

「こんな所に敵なんて来るのかよ？」

「GN粒子が散布されているとはいえ油断は出来ない。気を緩めるな。」

「はい、はい、わかりました。」

ロックオンの言う様にあたりは砂漠しかなくとても敵が来るようには思えなかつた。

レーダーも何一つ反応が無い。

それでも敵が100パーセント来ないとは言い切れない。

もしもここで取り逃がし増援を呼ばれたらカタロンの基地やプトレマイオスが危機に陥る事となる。

それは何としても阻止しなければならない。

ティエリアは全方位に集中し前に進んでいると砂漠の一角にソレら

しき物が見えてきた。

巨大なシェルターを砂で覆つていていたが間違いなく基地だった。

「スマラギさん、カタロンの基地を発見しました。」

「わかつたわ、こちらでコンタクトを取ります。敵機の反応が無いか再度確かめて。」

「了解。」

ティエリアは通信を切るとより一層警戒を強めた。

ケルディムもGNスナイパー・ライフルを構えて輸送艦の防衛に付く。スマラギは暗号通信でカタロンに呼びかけた。

しばらくすると基地のシェルターがゆっくりと開放されていく。

「聞こえるか？そちらを確認した。シェルターを開ける。」

カタロンからの通信が入りガンダム2機と輸送艦をシェルターの内部に移動する。

シェルターはまたすぐに閉じられた。

基地の内部は旧式のモビルスーツが10機以上並んでいた。

ガンダムと輸送艦も余裕で入りきる程内部を広かつた。

「これがガンダム！」

「アザディスタンを救つてくれた英雄の機体だ。」

ガンダムを見るとカタロンの構成員が迎え入れてくれた。

皆ガンダムに目が惹かれており作業を止め写真まで撮りだす者も居た。

輸送艦とガンダム2機が着地し乗組員とパイロットが降りてくる。ティエリアとロックオン、パイロットスーツにヘルメットを被つており顔は見えない。

するとカタロンの構成員が次々と一人に集まってきた。

「よく来てくれた、ソレスター・ビーニング！」

「歓迎するよ！」

「顔は見せてくれないのか？」

ティエリアはいつもと変わらず冷静に対処する。

「我々には秘匿義務がある。悪いがそれは出来ない。」

「そんな硬い事言つなよ。いいじゃねえかそれぐらい。」

そう言うとロックオンはヘルメットを脱ぎ顔をさらした。

その行動にティエリアは慌てる。

「キサマは何を！？」

「アレルヤを助けるとき助太刀してもらつただろ？」

ティエリアはロックオンを睨み付けた。

だが諦めて輸送艦のスメラギ達を迎えて背を向けて歩き始めた。

カタロンのクラウス・グラウドとソレスタークリーニングは今後の行動についての会談をする為に集まつた。

それと一緒にマリナと沙滋の保護も頼むつもりだ。

これから戦闘は熾烈を極める事になる。

戦闘員でない一人をこのまま置いておくにはあまりに危険だつた。

「会談に応じてくれて感謝します。クラウス・グラウドと言います。

」

「申し訳ありませんが自己紹介は・・・」

「事情は承知しております。」

「マリナ姫を助けていただきありがとうございます。以後は我々が責任を持って保護させていただきます。」

会談の場にはかつてのマリナの側近であるシーリン・バフティヤールも居た。

「シーリン・・・」

マリナは彼女もまた戦闘に参加して戦っている事に心配いを隠せない。

「ソレスタークリーニングに居たいの？」

「アナタこそ反政府組織に・・・」

「いけない事？」

その言葉に言い返すことが出来ないマリナ、自分が国を指導出来なかつたばかりに彼女を戦いへと誘つてしまつた。

今のアザディスタンの情勢が悪いのも私がしつかりできていれば・・・

・
そんな私に国の為に戦つてゐるシーリンをとやかく言つ事は出来ない。

「もう一人保護を頼みたい。沙滋クロスロード、民間人だ。いわれなくアロウズにカタロンの構成員の疑いを掛けられている。」

「ちょっと勝手に！？」

ここでやつと自分がなんでココに連れてこられたのかが分かつた。
ソレスタイルビーイングには居たくない、けれどもカタロンだつて戦いを引き起こす存在としては変わりない。

そんなところに沙滋は居たくなかった。

「そうするのが一番よ、沙滋君。」

スメラギはそんな彼を強引に引き取らさせた。

これ以上は民間人の彼にも被害が及ぶとスメラギも思つていた。

「そろそろ本題に入ろう、我々カタロンは現政権打倒の為・・・
申し訳ありませんが私達は政治的思潮で行動しているわけではございません。」

「ですがソレスタイルビーイングは連邦と対立している。」

「私達の敵は連邦政府ではなくアロウズです。」

「政府直轄の独立部隊を叩く事は我々の目的と一致するのではないですか？アロウズの悪行を征するため共に手を取り合い・・・」

「残念ですがここにあるモビルスーツではGNドライブ搭載型のモビルスーツには太刀打ち出来ません。」

「どうしても我々はアナタ達に協力したい。補給や整備だけでも力になりたいのです。」

「ありがたい申し出ですがそれも出来ません。こちらの情報を外に漏らすわけにはいきませんので。」

「ですか・・・分かりました。」

「ですが私達も出来る限りの事はします。」

「その言葉を聞けただけでもうれしいです。」

クラウドとスメラギは互いに握手を交わし今回の会談は終了した。

会談が終わり、クラウドとシーリンは別室に移った。シーリンはソレスター・ビーアーを取られ、落胆していた。

一 やはり無理だ、たわね。

「いや、あの言葉を聞けただけで十分だ。これからアロウズとの戦いは熾烈を極めるだろう。近い将来我々と手を取り合つ日も来るだろう。そうだろう? ジーン!」

ケラウトが見た先にはガンダムマイスターであるはずのロッケオン・ストラatosが居た。

「まあ、どうですかね？」

ガタロンの構成員であるライル・ティランティはソレスタルヒリイングの情報を漏洩しようとガンダムマイスターの誘いに乗ったが未だに何も掴めないで居た。

「たゞ、敵ではない事とカンタムの性能は凄まじく高い。それだけは確かです。もう戻りますよ、あんまり長くココに居たんじゃ怪しまれる。」

そう言つとライルは部屋から出て行つた。

ガンドームと輸送艦に戻ったメンバーはブトレマイオスに戻るべく準備を始める。

その中で刹那はスメドヰと話していた。

「どうするつもり？」

「マリナをアザディスタンに連れて行く。」

刹那は以前にマリナに頼まれた事を覚えていた。

ガンダムやプトレマイオスが公の場にさらされるのは避けなければならずこの前は聞いてやる事が出来なかつた。

腕を組みどうするかを考えるスマラギ、この輸送艦ならもしも発見されてもアザディスタンに危害はないだらう。

「分かつたわ、私はガンダムで先にトレシーに戻つてゐるわね。他のみんなにも私から言つておく。」

「了解した。」

それを聞くと刹那はマリナを連れて輸送艦でアザディスタンに向かう。

スマラギはガンダムでプトレマイオスに戻る。

基地のシェルターが開きガンダム2機と輸送艦が飛んでいった。

「マリナ・・・何処に行つたのかしら?」

シーリンは保護されたはずのマリナを探していた。

クラウドと話している間に何処かへ行つてしまい姿が見えない。てつくり子供達の相手をしてくれているものだと思っていたのだが・

・

マリナを見なかつたが、と、しらみつぶしに聞いて回つていた。それでも足取りはつかめないで居た。

この閉鎖された空間で見つからない訳がない。だとすると・・・

「まさか・・・ソレスター・ビーアイ・！」

だがガンダムと輸送艦はすでに基地から出て行つた後だつた。

「マリナ・・・」

沙滋はカタロンに居るつもりは無かつた。

砂漠を抜けた先には町がある。

何とかしてそこまで行きたかつた。

モビルスーツの置いてある格納庫で何か使えそうな物はないか探していた。

「おい！そこで何をしている！」

後ろから銃を構えたカタロンの構成員がコチラに向かってきた。どうする事も出来ずただ震えて立ち尽くすしかなかつた。

「お前はソレスタイルビーイングの・・・?」

どうやら自分はソレスター・ビーリングのメンバーだと思われているらしい。

本当に違うと言いたい所だが今はそれを利用させてもらおう。

「それが、なり革を使え。」

そう言つてその人は車のキーを放り

「あらがとう・・・」やつめす。

車を愛に耳ると苦笑いしながら沙汰は車の元へ走っていった。

乗り込むとキーを差込みエンジンを駆けた。

助手席の座席には砂避けのローブも置いてある。

「コイツで超えられるかな?」

沙滋は一人で砂漠を越えようとした。

幸いにも誰にも止められずに砂漠まで来れた。

車に研磨する問題が、車の問題が進む事が出来た。

「いのま進めば・・・」

大きな砂山を越えると突然フレーキを踏み車を止めた。

方には、・・・連邦軍」と「」

そこには連邦軍の軍艦が空を飛んでいた。

沙滋の居なくなつた部屋でバナージは一人コンピューターの画面に向き合つていた。

今の自分に置かれた状況が少しづつ理解してきた。

「アロウズ、まるで授業で聞いたティターンズじゃないか。どんな手段を使ってでも敵である者は排除する、昔連邦軍がジオンに対して行つた政策と似ている。

やはり人は変わることはあるのだろうか？

「！？これは・・・敵意が近づいてくる。」

バナージは立ち上がりコニコーンの置いてある格納庫まで走つた。

「急がないと。」

艦の構造はさつき見ていたコンピューターに載つていた。

真っ直ぐに格納庫のコニコーンまで来るとパイロットスースも着ずにコクピットに乗り込もうとする。

だがガンダムの整備をしていたイアンに気付かれてしまう。

「何をしているんだ！」

整備を中断しバナージのコニコーンに向かつて来る。

「敵が来ます！急がないと取り返しのつかない事になる。」

「敵だつて？そんな情報は・・・」

「レーダーに敵機の反応、カタロンに基地に向かつています。」

するとフェルトの通信が艦内に響き渡つた。

「行かせて下さい。俺はアナタ達の敵じゃありません！」

このままではカタロンの基地はアロウズの襲撃は免れることは出来ない。

少しでも早く救援に向かわなければならない。

スマラギはまだ戻つておらずガンダムもアリオスとのコニコーンしかない。

「・・・分かった。」

「本ですか！？」

「ただし完全に信用した訳じゃない。すぐにアリオスも向かわせる。それまでの間だけだ。」

「分かりました、ユニコーンで出ます！」

バナージは「クピットに乗り込みハッチを閉じた。

ディスプレイに右手をかざし生体反応を読み取らせた。エンジンが起動し全天周囲モニターが周囲を映し出す。イアンもユニコーンの発進準備を進める。

「今頼れるのはアレルヤとアイツだけだ。頼んだぞ。」

ユニコーンの足を固定しているカタパルトが動き出す。

移動されたユニコーン、ブトレマイオスのハッチが解放し外から光りが差し込む。

「場所はすぐにデータを送る。方角はここから北北西だ。」

「了解、ユニコーンガンダム出ます！」

カタパルトが動きだし体にGが掛かる。

ランドセルのバニアを吹かしカタパルトを切り離すとユニコーンは飛び立つた。

第十一話 それぞれの想い（後書き）

感想、アドバイス等お待ちしております。

第十一話 戦の理由（前書き）

やつと久々のナーナーの登場です！
でも戦闘は少ないです。スマッシュン。
戦闘シーンは書くのが苦手なのでアドバイスをいただけたうれしいです。

第十二話 戦う理由

「あんな軽装で何で砂漠を走っていた！」

「つー？」

連邦軍に拘まつた沙滋は厳しい尋問を受けていた。
兵の怒鳴り声にただ口を閉ざす事しか出来ない。

「どうしても言わない氣か？まあいい。もうすぐ生体認証の解析も
終わる。化けの皮が剥がれるのも時間の問題だぞ。」

「・・・・・」

民間人の沙滋に軍の尋問に耐える精神力はない。

ただ下を向いて時が過ぎるのを待つしか出来る事は無かつた。
すると部屋の扉が開きもう一人連邦軍の兵士が入ってきた。
「バイオメトリクスがヒットした！そいつはカタロンの構成員だ！」

「やはりそうか！」

「違う！僕は・・・」

僕はカタロンの構成員なんかじゃない、そう言いたかった。

だが連邦兵は問答無用で沙滋の顔面を殴りつける。

「そんなウソが通用するわけないだろ！」

「違う・・・」

殴られた所がヒリヒリと痛む。

カタロンの構成員の容疑を掛けられてしまつた以上尋問はさらに過
激さを増すだろう。

情報を聞き出すまでは殴るくらい当たり前、でも沙滋はカタロンの
情報なんて何も知らない。

そう訴えかけても聞いてくれる事は無いだろう。

沙滋はこれから起ころる事に恐怖した。

「手荒な真似は止せ！」

声のする方を振り向くとまた別の兵が来ていた。

尋問していた二人が姿勢を正し敬礼をする。

「後の事は私がする。」

「スミルノフ大佐、しかし・・・」

「命令だ、下がれ！」

「後の事は私がする。」
「スマイルノフ大佐、しかし……」
「命令だ、下がれ！」
スマイルノフの命令で一人の兵はもう一度敬礼をすると部屋から出て行つた。

「キリは戦士ではないな。」

え・・・?」

「長年軍に属たから分かる、キミは戦う者の田をしつていない。つまりローランドはなーいっつー事だ」。一本阿ゲぬひーのうば。

•
•
•
•

さつきまでの尋問とは違い怒鳴つたりはしてこない、だがすぐには信用する事は出来なかつた。

「ソノマフノジ、ソノダニ町ハ開つて二川の上

スルノフの言葉に沙滋は驚いた、ソレスタイルビーアイシングの事

て一言は言つていないのでどうして……

さうきの連邦兵も知りないはうだ
「里口から」

「理由はある。元々夕を見るとキミは数週間前までガンダムが現れたクラウドでコロニー開発に従事していた。そしてガンダムと戦闘があつたこの地域にキミが居る。簡単な推理だよ。」

「僕は・・・カタロンでもソレスタークビーイングでもありません。」「分かっている、ただ話を聞かせて欲しいだけだ。悪いようにはしない。」

沙滋はスミルノフの顔を見た、初めて話を聞いてくれる人に出会えた。

/ /

ブトレマイオスから発進したユニコーンは送られてきたデータを頼りに指定座標に向かう。

あたり一体砂漠しか見えず今自分がどこに居るのかさえレーダーを見ないと分からぬ。

「今はレーダーを信じるしかない。急がないと！」

バナージはユニコーンのランドセルのバニアを全開にする。パイロットスーツを着ていないせいで機体に凄まじいGが掛かる。

「つ！？・・・アレは・・・？」

機体の加速で揺れる「クピットの中でバナージは見た。上空に赤い粒子を発生させているモビルスーツの部隊が同じ方角へ向かっている。

「このままじゃ間に合わない！」

バナージは指定座標へユニコーンを急がせる。だがアロウズのモビルスーツ部隊の襲撃には間に合わなかつた。

「カタロンの基地らしき施設を発見しました。

「よし掃討作戦を開始する。」

バナージのユニコーンが追いつくまでにアロウズのモビルスーツ部隊に基地が見つけられてしまう。

砂に隠されたシェルターにアヘッドのビームライフルが砲撃を始める。

ビームの直撃でシェルターは呆気なく破壊されてしまい内部への侵入路があらわとなる。

だが破壊の衝撃で砂が周囲に舞い視界が悪くなる。

「シェルターの破壊を確認。これより内部に・・・カタロンのモビルスーツが出てきました！」

内部へ侵入しようとした所にカタロンの旧式のモビルスーツが防衛の為に出てきた。

どれもフラッグやティエレンばかりで今のモビルスーツにとても太刀打ち出来ない。

アヘッドに向かいレールガンを発射するがどれだけ撃つても簡単に避けられてしまう。

「そんな旧型のモビルスーツで……」

この作戦に参加しているソーマ・ピーリスは悲痛な気持ちで居た。相手との戦力差は歴然としている。

わざわざ殲滅作戦などしなくてもよいのではないのか？

いくら上層部からの命令とは言え納得が出来ないで居た。

そうしている間にも次々とカタロンのモビルスーツが破壊されていく。

「これより掃討作戦に入る。オートマトン射出準備。」

部隊長のアヘッドがキルモードに設定されているオートマトンを内部へ射出しようとすると。

「そんな！？待って……！」

その行動にピーリスは驚いた。

無抵抗の人間までも容赦なく殺すアロウズの本質がやつと分かつた。しかし彼女にそれを止める術は無かつた。

無常にもオートマトンは射出されようとしていた。

「ん！？新たな敵影を確認、こちらに向かってきます。」

部隊長が部下の報告を受けて振り向く、そこには虹色の機体が飛んでいた。

「遅かった……」

バナージが見つめる先には無残に破壊されたモビルスーツが横たわっていた。

見るからに戦力差は圧倒的にカタロンの不利だ。

それでもまだ懸命に戦っているモビルスーツが数機残っている。これ以上被害を大きくさせないためにも赤い粒子を出しているモビルスーツに接近する。

ゴニコーンに気付いた敵機がビームライフルを撃つてくる。

左腕のシールドをX字にスライドさせ機体の前方に構える。

シールドのエフィールド発生装置が飛んで来るビームを弾く。

ゴニコーンには頭部のバルカンしか射撃武器は無いためビームサー

ベルで斬りかかるしかない。

シールドでビームを防ぎながらアヘッドに迫る。

接近するゴニコーンにアヘッドはビームライフルの攻撃を止めサー

ベルに持ち替える。

「来る・・・！」

右手にビームサーベルを握ったアヘッドが接近戦を仕掛けてくる。バナージも左腕のビームサーベルを引き抜き鍔迫り合いに持ち込むと田の前に居るアヘッドの頭部にバルカンを発射する。

弾は頭部に命中しモニターが割れ装甲が凹む。

さらに左腕のシールドを横になぎ払い頭部を吹き飛ばすとアヘッドは地上の砂漠へと落下していった。

落下していくモビルスーツに戦闘能力が無いのを見ると次の標的に向かう。

「これ以上はやらせない！」

敵のモビルスーツ部隊にバナージは飛び込んでいく。

アロウズは突然現れた謎のモビルスーツに困惑していた。

こちらが戸惑っている間にすでに1機落とされてしまっている。

「隊長、アレは・・・？」

「分からん、データに該当する機体はない。だが今回の作戦はカタロンの基地の殲滅だ。ピーリス中尉！」

「・・・・・」

「中尉！」

「！？ はい・・・」

ピーリスは敵であるはずの白亜の機体に引かれていた。

まるで心の中を覗かれているような、でも不思議と嫌悪感は無かつた。

むしろ暖かくて安らぎを感じていた。

「白いヤツは中尉に任せせる。その間にオートマトンを基地に射出する、分かつたな！」

「了解！」

部隊長の命令を聞くとピーリスは単機でゴニコーンの撃墜に行く。ピーリスのアヘッドにバナージもすぐに気付いた。

「手ごわいのが来る。でもここで時間は掛けられない。」

ピーリス以外の機体は尚も基地への攻撃を止めようとはしない。これ以上被害を拡大させる訳にはいかない。

アヘッドを視界に捕らえるとバルカンで威嚇をする。

弾は簡単に避けられてしまいゴニコーンにビームライフルのビームが飛んでも来る。

バナージもコレを回避しビームサーベルで斬りかかるとするが。「敵意が感じられない。どう言う事だ？」

敵意の感じる事の出来ない相手にバナージは困惑つ。だがそのまま右手のビームサーベルを振りかぶる。

アヘッドは軽くスラスターを吹かし横へ回避するがその隙にゴニコーンはアヘッドを掻き潜り基地へ向かつて行く。

「しまった！？」

機体を反転させビームライフルで背を向けて飛んでいるゴニコーンを狙い撃つ。

しかしゴニコーンは背中に田が付いてるかのよつビームを避けていく。

ついには射程外へと距離を開けられてしまう。

「何をやっているのだ・・・私は・・・私は超兵なのに・・・！」

右腕を側面の戦闘画面に打ち付けると自分の不甲斐無さを悔やんだ。ピーリスは敵を撃ち損じた悔しさもある一方、この掃討作戦を止めてくれるのではないか、と、ゴニコーンに微かな希望を抱いた。

第十二話 戦つ理由（後書き）

アドバイス、感想等お待ちしております。

第十四話 燃えるアザテイスタン（前書き）

バナージとマイスターの絡みが少ないです。

次回でちゃんと出来る様に話を進めていきます。

第十四話 燃えるアザティスタン

ピーリスのアヘッジを後にじバナージは基地へ向かつた本体を追う。だが時はすでに遅く隊長機がオートマトンを基地内部に向け放っていた。

地上へ落下していくオートマトンを見て直感的に感じる。

「アレはダメだ！ 急いで止めないと！」

戦闘画面に小さく映っているだけにも関わらずバナージはオートマトンの本質を感じ取る。

オートマトンは人間を殲滅対象として設定されている。

基地内部で活動を開始したら瞬く間に血の海となるだらう。

ユニコーンはバーニアを噴かして地上へ降下する。

起動したオートマトンを狙いバルカンを撃ちまくる。

弾に直撃したオートマトンは跡形も無く破壊される。

だが数が多くつた、ユニコーン1機のバルカンだけでは数が減つていかない。

さらには上空からアヘッジのビーム攻撃がユニコーンを狙う。

「これだけの数、一人じゃ無理だ。殺氣！？」

アヘッジからの攻撃を敵意を感じ取りながら回避していく。

敵意を感じ取る事で相手より一瞬でも早く動く事が出来る。

さらにシールドのエフィールド発生装置でビームは全て無効化される。

「何でコレだけの数のビームを避け切れるんだ！？」

「あのシールド、ビームを弾いてるー？」

数で圧倒しているにも関わらずユニコーンを落とす事が出来ない事に次第に焦りが見え始める。

ユニコーンの性能とバナージの戦闘能力で敵からの被弾は未だにゼロだがオートマトンへの攻撃が出来ないで居た。

「このままじゃ・・・」

ビームをシールドで防ぎながら横目で全天周囲モニターの後方を見る。

そこには起動したオートマトンが4本の足を砂の上で器用に動かし基地へ入つていった。

「ダメなのか！」

自分一人では何も出来ない現状がバナージは悔しかつた。

それにこのまま数で押されではユニコーンでも持たないかも知れない。

「アレを使う。それしか！」

NT-Dの使用を覚悟した、パイロットである自分をNT-Dに認知させガンダムに変身する。

バナージはもうそれしかないと考えた。

ユニコーンの装甲の隙間からピンク色の光りが漏れ出す。するとアヘッドの1機がビームに貫かれ爆発した。

「何だ！？・・・援軍？」

レーダーにソレスタークリービングのガンダムが3機こちらに向かつてきていた。

その内の1機、ケルディム・ガンダムがGNスナイパーライフルで敵機を狙撃した。

「無事か？」

「アナタは・・・？」

「モビルスーツは俺達が食い止める、内部を頼む。」

「分かった。」

ソレスタークリービングのガンダムから通信が入つてきた。

援護が来てくれた、これならNT-Dを使わなくても出来る。

通信画面に映る緑色のスーツを着たパイロット、ロックオンを信じてアヘッドに背を向けて基地に侵入する。

「敵の増援を確認、ソレスタークリービングです！」

「各機ガンダムと応戦しろ。」

隊長機の指示で固まつていた部隊がそれぞれ展開していく。

「彼に任せて大丈夫なの？」

「今はあの機体が基地から一番近い。信用するしかない。」

アレルヤは突然トレマイオスから出撃したバナージをすぐには信
用出来ないで居た。

身元不明、何処で作られたのかも分からぬモビルスーツ、疑うに
は充分だ。

「それよりも今はコイツ等を何とかするのが先だ！」

ロックオンが一人の会話に割って入る。

アロウズの卑劣な作戦で仲間が殺されようとしている。

そんな事を黙つて見ている訳には行かない。

「アロウズ、許さねえ・・・許すもんか！？」

ロックオンはGNスナイパーライフルを腰にマウントさせGNピス
トルに持ち替える。

両手にGNピストルを持つとアヘッドに凄まじい速さで連射する。

「逃げんじゃねえ！」

回避行動を取るアヘッド、だが連射されるGNピストルのビームに
飲み込まれてしまう。

たちまち装甲は貫かれGNドライブが破壊される。

「高濃度圧縮粒子開放。」

ティエリアはセラヴィーのGNバズーカを連結させ機体前方に構え
る。

GNドライブからエネルギーがチャージされる。

「ダブルバズーカ、バーストモード！」

丸いビームの塊がアヘッドに目掛けて発射する。

シールドを構えて防御姿勢を取るがビームは機体を飲み込み爆発す
る。

「無人兵器による虐殺行為、自ら引き金を引こうともしないなんて

！」

アレルヤのアリオスは変形すると敵モビルスーツに一気に接近する。
モビルアーマーの加速性能に敵は反応する事が出来ないで居た。

ビームライフルを構えてビームを発射する。

アリオスをロックする事は出来ないがやらないよりはマシだ。

4機がかりでビームライフルを撃つ。

だがそんな攻撃に当たるアレルヤデでは無い。

ノーズユニットを展開し胴体を挟み込む。

「罪の意識すら持つ気は無いのか！」

胴体を挟まれたアヘッドはそのまま半分に切断され爆発した。

ガンダム3機の介入により基地の掃討作戦はこれ以上の進行は無理だ。

破壊されていくモビルスーツを見て状況は不利と判断した隊長機は撤退命令を下す。

「初期目標は完遂した、撤退する！」

ガンダムの迎撃から免れた機体が上空へ離脱して行く。

逃げるアロウズにロックオンの悲痛な叫びがこだまする。

見えなくなっていく機体に一心不乱にビームを撃ちまくる。

「逃げんなよお、逃げんなよアロウズ！……！」

内部へと侵入したバナージ、そこには悲惨な現状が待ち構えていた。起動したオートマトンのマシンガンが武装したカタロンの構成員を撃ち殺していた。

あたりには血が飛び交い動けなくなつた人をオートマトンの足が無残にも踏み碎く。

必死になつて手持ちの武器で応戦するが硬い装甲を撃ち抜く事は出来ないで居た。

「酷い・・・こんな・・・」

これではダカールの戦いと同じ、いや、それ以上に酷かった。

アロウズは上層部の命令に従つてはいるだけ。

それに主義や思想などは無い。

ジンネマンや一緒に戦つた袖つきのメンバーとは違つ。

「下がつてください！ユニコーンで破壊します。」

通信で構成員に呼びかける。

だがバナージの言う事を聞く者は居なかつた。
それどころかユニコーンに銃を向ける人も居た。

「違う、俺は敵じゃありません。あなた達の味方だ！」

必死に呼びかけるが恐怖に錯乱する人々には通じなかつた。

勝てるはずも無いオートマトンと戦いまた一人と死んでいく。

「！？避けてくれよっ！」

バナージは頭部のバルカンでオートマトンを器用に撃つしていく。
しかしバルカンでは威力が強すぎて破壊の衝撃で地面がえぐれ壊れたパーザーが周囲に飛び散る。

それでも少しづつ数が減つていく、バナージがいち早く気配を察知して動いた事によりカタロンの被害は想定よりも少なく済んだ。
最後のオートマトンがユニコーンにマシンガンを撃つてくるがモビルスーシの装甲には効かない。

ユニコーンの足でソレを踏み潰すと戦闘は終わつた。

「終わった・・・でも。」

それでも人的被害は少なからず出たし今回の掃討作戦で基地の場所がばれてしまつた。

内部はモビルスーシとオートマトンの攻撃でボロボロに破壊されており復旧には時間が掛かる。

血で汚れた基地を見てユニコーンはブトレマイオスに帰艦する為ガンドムに続く。

沙滋はスミルノフ大佐の計らいで逃がしてもらえた。

だがカタロンの基地を目指しアロウズが動いている事を聞かされた。乗つてきた車に乗り方位磁石で位置を確かめながら基地に車を走らせた。

その途中で見覚えのある光りが空を飛んでいくのを見る。

「アレは！？」

擬似GNドライブの赤い粒子が空に舞つてた。

車のアクセルを踏みスピードを上げる、だが基地に到着するには20分以上掛かってしまう。

それでも沙滋は急いだ。

小型輸送船でアザディスタンへ向かつた刹那とマリナ。

操縦し進んでいく。

もうすぐアザディスタンに着く。

タンの国境を渡る。

「アザーディスタンが燃えてる……どうして……どうして……

せっかくここまで来たのに、結局何も出来ないなんて・・・

— これだけの破壊規模、テロではない。

状況把握の為空域をレーダー外で探索する。

「あのモビルスーシー!?まさか・・・!」

それはアルケリ・ガンダム、因縁の相手アリート・アル・サリーチェス。

「ぐつ！？現空域を離脱する。」

「刹那、でもアザディスタンが・・・」

「この機体では無理だ、捕捉される前に離脱する。」

燃えるアザティスタンが視界から遠ざかっていく。
マリナは涙ながらに見つめた。

第十四話 燃えるアザテイスタン（後書き）

「メントお待ちしております。

第十五話 傷跡（前書き）

いつも見ていただきありがとうございます。

懸命な人は「ご存知だと思いますがコニークーンには武器がビームサー
ベルとバルカンしかありません。

そこでこの武器を使って欲しいなどリクエストが有りましたらコメ
ントに書き込んでください。

本編で使いたいと思います。

でもサテライトキャノンとかは無理ですのであしからず。

第十五話 傷跡

「そんな・・・」

戦闘の終わった後の基地は燐々としていた。

負傷した人の治療、脱出する為の物資の搬送に皆必死に動いていた。壁は崩れあたり一面に血が飛散している現場を見て沙滋は恐怖する。崩れた瓦礫からまた一人、死体が運び出されていく。

「負傷兵はこっちへ運んでくれ。」

「ライトの向きを替える、敵に見つかる!」

もはや原型を保っていない人の亡骸、漂う薬莢の匂い、これが戦争だというのか・・・

僕が連邦軍に話さなかつたらこつはならなかつたのか・・・自分のせいで人が死んでいくと言つ現実を沙滋は認識できないで居た。

カタロンの防衛に駆けつけたソレスター・ビーリングのガンダムマイスター3人とユニコーンのパイロットであるバナージも見るも無残な姿となつた現場を目の当たりにしていた。

「無抵抗な人まで殺すなんて、こんなもの!」

かつて地球連邦軍とジオン残党の袖つきを行き来している時にもこのような現場は幾度も見てきた。

ビーム兵器の攻撃で髪の毛一本として残らず死んでいく人も居た。何度見てもこの光景は辛かつた。

たとえ世界が変わろうとも人は戦う事を止める事が出来ない。

そして悲劇と言う名の連鎖がいつまでも続く。

もうこれ以上悲しい想いをする人を増やしてはいけない。

「そうだよね、オードリー。」

すると援護に来てくれたソレスター・ビーリングのガンダムから通信が入った。

「機体は無事か?」

「アナタは？」

「俺はロックオン・ストラトス。ケルティムガンダムのガンダムマイスターだ。」

「ガンダムマイスター？」

「今回の事は礼を言つ。お前のお陰で被害が少なくすんだ。」

「俺はそんな・・・ただ、今の自分に出来る事をしただけです。」

「それでもさ、他のメンバーも紹介する。コクピットから降りて来い。」

ロックオンはそう言うと通信を切つた。

画面からロックオンの顔が消えるとセンター コンソールを操作する。ロックが解除されるとコニコーンのコクピットが開放され外の空気が入つてくる。

薬莢の匂いが充満しており破壊された壁などから砂埃が舞つて息苦しかつた。

バナージは「クピットから身を乗り出すとアンカーに足を掛けてゆっくりと下へ降りていく。

床へ足をつけるとロックオンと残りの2人のマイスターが近づいてきた。

「パイロットスーツも着てないのか？」

「ロックオン・・・さん」

「さん、なんて付けなくていいよ。」

「キミがあの白いモビ尔斯ーツを操縦していたのかい？」

ロックオンに続きアレルヤがバナージに話しかかる。

だがバナージはプトレマイオスの乗組員をまだ全員覚えていない。初対面のアレルヤに戸惑っていた。

「ああ、そういうえば初めて会うんだったね。僕はアレルヤ・ハプティズム、アリオスのガンダムマイスターだ。もう1人は・・・」

「知っています、ティエリアさんですよね。」

「つて、知つてたのか。」

「はい、意識が戻つてすぐに会いました。」

「なら説明しなくてもいいね。」

アレルヤは心なしかすこし残念そうだった。

話が終わるとティエリアがバナージに詰め寄つてきただ。

「キミはどうしても聞かなければならぬ事がある。」

「・・・・・」

高圧的に話すティエリアにバナージは臆せずに話しを聞いた。
真っ直ぐにティエリアを見る。

「キミはどうしてアロウズの襲撃が分かつたんだ。」

「それは・・・・・」

「出撃前にイアンから聞いた。トレミーがアロウズのモビルスーツを索敵するよりも前に彼は敵の存在に気付いていた。これは一体どうゆう事なのか説明してもらひ。」

それは自分がニユータイプだから、などと言つても信じてくれる訳がない。

それに彼らにはニユータイプと言つ概念など持ち合わせていない。
説明した所で理解など出来ないし、バナージ自身ニユータイプが何なのははつきりと分かっていない。

何故いち早く敵を見つけたのか、バナージはそれを説明する事が出来ない。

「まあいいじゃねえか、そんな細かい事。コイツが来なけりや被害はもつと広がつていたんだ。」

「だが、それとコレとでは・・・・・！」

「少なくとも敵じゃないんだ、信じじろよ。」

「つ！？・・・・分かつた、だがいざれば説明してもらひが。」

ロックオンが宥めるとティエリアはその場を立ち去つた。

歩いて行くティエリアの背中を3人は見つめていた。

「悪い人じやないんだ、ただ任務に忠実すぎると言つが。」

「アレルヤさん・・・・・」

「これ以上ココにいてもしょうがない。トレミーへ戻るぞ、えーー

と

「バナージ・リンクスです。」

「オーライ、アレルヤも行くぞ。」

「わかったよ。」

3人はそれぞれのモビルスーツへ向かう。バナージはもう一度コニコーンの所まで来るとアンカーに足を掛け上昇する。

コクピットに乗り込みシートに座るとセンター・コンソールに右手をかざして生体反応を読み取らせる。

3人から離れたティエリアは何故アロウズに情報が流れたのかを考えていた。

外部に情報が漏れるようなミスはしていない。
ならばどうして、内密者が居るのか？

すると基地の隅で立ちすくんでいる沙滋を見つけた。

「そんな・・・僕は・・・」

悲惨な現場を見て震えているのもあるだろうが様子が少しおかしかった。

それに攻撃を受けたのだからシヒルターに非難しているはずなのにココに居る。

そんな沙滋に近寄ると肩を掴んだ。

「どうした、何故ココに居る?..」

「ぼ・・・僕は・・・」

「話は後で聞く。ガンダムでトレミーへ戻るぞ。」

そう言いつと沙滋を引き連れてセラヴィーに向かう。

第十五話 傷跡（後書き）

感想をお待ちしております。

第十六話 晴れない疑惑（前書き）

沢山のコメントありがとうございます。
戦闘シーンはまたしばらく先ですが、その時には新しくコーコーン
に武器を持たせたいと思います。

第十六話 晴れない疑惑

プロレマイオスへと帰還するガンダム、ティエリアはハッチを開け沙滋と共にコクピットから降りる。

ティエリアは無言で沙滋を人の居ない場所へと連れて行く。

た。

「何をした。」

ほんとうの僕は

「ちたんたな 謙だキミは? アロハのスハイが?」

「訳を話してもうつれ、沙滋クロスロード。」

ザハニカレル上黒にている事は出来なかつた

取りかえしの付かないことをしたことはこれ以上ない程に分かつて

い
る。

沙滋はこれまでに起きたすべての出来事を語った。

トレマイオスは光学迷彩を展開し砂漠の景色と同化し姿を隠して

四
三

カタロンが脱出の準備が整うまではここで基地を防衛するつもりだ。ブリッジにいるイアン、スメラギ、バーナーはスクリーンに映し出

されて いる 基地 内部 の 様子 を 見て いた。

れていく。

「これがアロウズのやり方なんですか？」

「さうよ、アロウズは治安維持を掲げているけど実態は今見ているとおり。反抗する者は容赦なく平和と言つ名田のもと排除されるわ。」

「こんな事が平和に繋がる訳ありません。こんな間違つてゐる。」

「バナージ君の言つとおりよ、そして地球連邦に加盟しない国は弾圧を受けるわ。こんな事が許される訳がないわ。だから私達ソレスタルビー・イングはアロウズと戦つてゐる。」

「でも、だからと言つて戦いで解決しようとするのも違う。ソレスタルビー・イングだつてやつてる事は同じじやないですか？」

「アナタの言いたい事は分かるわ、でも連邦議会に入つて中から変えていこうとしたら時間が掛かりすぎてしまつ。その間に世界は変わつてしまつわ。・・・結局私達にはこいつあるしか手段がないのよ。」

「正しい事なんて何処にもないんですね・・・」

「そうなのかもしないわね。でも私達の戦いが後の世に繋がる事を信じてるわ。」

「なら俺も信じます、自分のやるべきと感じた事を。だからユーローンでアロウズと戦います。」

その言葉はスメラギは驚いた、今回の件は確かに助かつた。だがこれからもアロウズと戦うとなると死が付きまとつ事になる。この少年にそれほどの意思と覚悟があるのだろうか。それにまだバナージの身元が詳しく分かつていなければ、残した家族や友達の事はいいのだろうか。

私にはもう誰も残つては居ないのだけれど・・・

それを思うと素直に歓迎は出来なかつた。

「バナージ君、でもアナタは私達とは関係が・・・」

「でも、こんな理不尽を許しちゃいけないんだ。それが俺とユーローンに託された想いなんです。」

「これは戦争なのよ、もしかしたら死ぬかもしれない。それでも・・・」

「・・・」

「俺は負けません、生きて帰るんです。」

そう、向こうではオーデリーが待つていて。

俺との約束を信じて待つているんだ。

だから死ねない、死ぬ訳にはいかない。

「本気・・・なのね？」

「はい、覚悟は決めています。」

「・・・分かったわ、でもその前にアナタのパイロット適正を調べさせてもらうわよ。イアン、バナージ君にシミュレーターを受けさせてあげて。」

「ああ、それはいいがいつするんだ？」

「今すぐやりましょう、いいですよねスメラギさん？」

「いいけれど疲れてない？ 戦闘が終わってそう時間も経っていないけど。」

「大丈夫です。イアンさん、そのシミュレーターやらせてください。」

「だとよ、そう言つ訳だから連れてくぞ。」

「ええ、お願ひ。」

スメラギが言うとイアンはブリッジの扉まで歩いて行く。パネルを操作し扉を開けるとそれに続きバナージはイアンについて出て行く。

ブリッジに残ったスメラギは一人ため息を付いた。

「あまり賛成は出来ないけど・・・それにしても、本当に彼の情報がデータベースに無いのは何でなのかしら・・・」

顎に右手を当ててその事について考えるスメラギ。初めて会った時にインダストリアルフの7・8番街に住んでいたと言っていたがそこは工業団地だ。

この年で働いていたのだろうか、だがそれ以前に7・78番街なんて場所は存在しない。

それには、どれだけデータバンクを調べてもバナージ・リンクスのデータは存在しなかつた。

ヨーロッパのデータの解析も思つように進んでいない。

分からぬ事だけだった。

ていた。

激しい音が周囲に響く、沙滋の左の頬は赤く腫れていた。

「何と言ひ・・・何と言ひ愚かなことを・・・」

「こんな事になるなんて思っていなかつた、僕はただ戦いから離れ

涙を流しティエリアに訴える、だがティエリアの眼差しは変わらなかつた。

「彼らの命を奪つたのはキミだ！」

沙滋ははつと息を呑んだ。目を背けていた現実を突きつけられる。

ギミの愚かな振る舞いた。自分に違ひ、自分には関係ない、違ひ、世界の出来事だ。そう言つ現実から目を背ける行為が無自覚な悪意となりこのような結果を招く。」

「ぼ・・・僕は・・・そんなつもりじゃ・・・」
体から力が抜けていき地面に膝を付く。

沙滋は大声を上げて涙を流した。
その声を聞いて刹那が近くからやつて来る。

アサテイスタンから戻ってきたばかりで状況があまり把握出来ていなかつた刹那はティエリアに近づいた。

「ティニア、どうした？」

「刹那、戻っていたのか。」

「どうなつてゐる、アレは？」

「アロウズの仕業だ、そしてその原因は彼にある。」

泣き崩れる沙滋を見る刹那、詳しくは分からぬがティエリアの言

戦いを嫌がっていた沙滋だが、もう引き返せない所に来てしまったらしい。

これもソレスタルビーイングのガンダムが武力介入して起こった歪みなのだろうか。

じつしてまた悲しみを広げてしまった。

「沙滋・クロスロード・・・」

ただ静かに名前を呟いた。

イアンからシニコーレーターのデータがブリッジのスマラギに送られ
てきた。

バナージは適正は基準を上回つており取りあえずは戦力にはなる。

۷۰

データを見て他の4人とフォーメーションを組めるように思考を巡らした。

ブリッジのコンピューターで次々と新しく戦術プランを組み立てて

「」

「…あの…」シーリーにはピームを隠す機能があるから、

だがこのデータはコンピューターで測ったデータであり実際の戦闘でのバナージのニュータイプとしての能力とサイコフレームの驚異

的なインターフェイスについて彼女はまだ知らない。

第十六話 晴れない疑惑（後書き）

コメント、アドバイス等お待ちしております。

第十七話 再び戦地へ

「ソレスタイルビーアイングが早急に基地を離れる資材や食料を手配するそうだ。」

自室でロックオンは自身の持っている通信機で崩壊した基地に居るクラウスに連絡を取つた。

迂闊にプトレマイオスの通信機を使つてばれる訳には行かない。通信画面の向こう側のクラウスの顔は少し疲れているようだった。

「他の施設に移送が完了するまでは俺達が防衛する。」

「そうか、助かると彼らに伝えてくれ。・・・一体、誰がここ之情報を流したんだろうな？」

クラウスの疑問にロックオンは鼻で笑つた。

「スパイの俺にそれを聞くのか？」

するとスメラギの声で艦内に通信が流れた。

「全員至急ブリッジに集合してちょうどだい。」

艦内放送を聞くとロックオンの表情が変わつた。

いつものニヒルな表情ではなく、その目は鋭かつた。

「呼び出しが掛かつた、通信終了。」

通信機の電源を切ると制服の緑の上着を纏い部屋から出て行つた。

「みんな集まつたわね、これから私の行動についてだけど・・・ミレイナ、カタロンの状況は？」

ブリッジに集まつたメンバーを見るとスメラギは話を始めた。

ミレイナはパネルを操作するとモニターに基地内部の映像を映し出した。

「カタロンさん達の移送開始は予定通り1200に行われるです。」

「アロウズはもう一度ここに来る可能性が高いわ、そこで私達が囮になつて時間を稼ぐプランよ。各員は戦闘に備えてちょうだい。それからもう一つ、新しいメンバーを紹介するわ。」

そう言うとスメラギはブリッジの扉の前まで歩いて行きロックを解除した。

「もう知っている人も居ると思うけど紹介するわね、バナージ・リンクス君、機体は彼が乗っていたコニコーンにそのまま乗つてもらいます。これからは一緒に戦っていく仲間よ。」

扉の前にはバナージが立つておりスメラギに誘導されるがままブリッジに足を進めた。

全員の視線がバナージ一点に集中する。

「よ、よろしくお願ひします・・・」

「慣れるのに時間が掛かるかもしだいけど頑張ってね。他のみんなも紹介するわ。」

スメラギは残りのメンバーについてバナージに紹介した。その間もみんなの視線はバナージに集まっていた。

「戦況オペレーターのフュルト。」

「よろしくね、バナージ君。」

「砲撃士兼操舵手のラッセ。」

「ラッセ・アイオンだ、頼んだぜ。」

「それでの子がミレイナ、フュルトの補佐やガンダムの整備もしてもらつてるわ。」

「はいです！バナージさんこれからよろしくです！」

ミレイナは一人バナージの近くまでくると両手を握りしめた。彼女のようなタイプの女性と会つた事の無いバナージは少し戸惑いながらも苦笑いした。

オードリーは小さい頃からの英才教育で上に立つ者としての心構えを持つており少女のようなあどけなさはあまり感じられない。

マリーダさんは過去の辛い記憶もあるが軍人としての使命を真っ当していた。

ミコットのような感じでもない。

みんなどうしているんだろう・・・

戸惑いながらもメンバーの紹介が終わるとスメラギが各員に指示を

出す。

「ラッセ、トレニーを海岸線に向けて発進させて。」

「了解、敵さんに見つけてもらわないとな。」

「フェルトは周囲の索敵をお願い。ミレイナ、光学迷彩を解除して。」

「「了解」です」

「マイスターはガンダムで待機、バナージ君アナタにも出撃してもらいます。」

「分かりました、ユニローンで出ます。」

「イアンにあの機体に合わせて武器を調整してもらつたわ、後で確認してちょうだい。フェルト！」

「GNドライブ出力安定、プトレマイオス発進します。」

プトレマイオスについている2基のスラスターから緑色の粒子が放送出する。

ゆっくりと砂の上から浮かび上るとそのまま上空へと飛んでいった。

バナージはブリッジを後にする、パイロットスーツに着替えようとモビルスーツデッキに向かった。

「結局戦うしか出来ないのか、俺は・・・」

ユニローンの元へ向かう途中でガンダムマイスターの一人である刹那・F・セイエイがバナージを待っていた。

立ち止まるバナージに刹那は近寄ると疑問に思つていた事を聞いた。

「お前があの白いガンダムのパイロットなのか？」

「アナタはたしか・・・」

「コードネームは刹那・F・セイエイだ。それよりも答えてもらつぞ、あのガンダムについて。」

ユニローンがガンダムに変身するのを知っているのはソレスタルビーリングのメンバーでは刹那とティエリアだけだ。

スマラギの話を聞いたバナージはユニローンの分析があまり進んで

いなのを知つてゐる。

だからガンダムについては知られたくは無かつた。

特にサイドフレームは原因不明のエネルギーを生み出す。

それを解読されたら悪用されかねない。

それはユーローンを託してくれた父の思う所ではないはずだ。

「あれは譲つてもうたんだ、だから俺はユーローンの事はあ

知らないんだ

「では何故、何の為に戦う?」

「戦うのは理由が必要なんですか?」

ノルマニカ・トキヲ・シテ

これまでの袖のナビゲーション：フロントナビゲーションの戦いで死んでしまった人々

を悔する行為だ。

その人々の想いはユーローンを通してバナージに託されている。

口にせんもマコーダさんも俺の中で行き続いている。

もうこれ以上繰り返してはいけないんだ。

悲しい思いも、憎しみの怒りも

覚悟なうあります！俺はHITMANで戦します！」

「おお、分かってる。俺が前に出る

「お前が幾何で、何を教えるんだ？」

アートギャラリーパーティ

刹那の背中を見てバナージ先急いで付いていく。

刹那と一緒にカタロンの基地へと戻ってきたマリナ、瓦礫に埋もれる基地を見て呆然とする。

「シーリン、シーリンは？」

数時間前まで子供達と一緒に居た場所が今は見る影も無かった。慌ただしく動く人々の中からシーリンを探そうとする。

だがその中に彼女の姿を見つける事は出来なかつた。

「そんな・・・」

彼女が居ない、その現実がマリナを悲しみへと誘う。まぶたに涙が溜まっていく。

アザディスタンを救う事も出来ず、彼女までも死なせてしまった。

「アザディスタンに戻ったのじやなかつたの？」

聞き覚えのある声が聞こえた、急いで後ろに振り向くとそこに彼女は居た。

目だつた怪我も無くシーリンはいつもとままだつた。

「シーリン・・・！」

マリナは涙を流しながらシーリンの胸に飛び込んだ。

「どうしたの？涙なんか流して。」

「よかつた・・・無事で・・・」

声を枯らせながらマリナは胸の中で泣き続けた。

そんな彼女を優しく抱きしめた。

「シーリン・・・アザディスタンが・・・私達の故国が・・・」

「！？アザディスタンがどうしたの？」

燃えかかるアザディスタンの事を言おうとした。

だが彼女達の上空をソレスタークリービングのプトレマイオスが飛んでいた。

瞳に大きく写るプトレマイオスも見る見る内に遠ざかり次第に見えなくなる。

「行くのね、刹那。」

再び戦いの中に身を投じようとする刹那をマリナは思い続けた。

ブトレマイオスは故意にレーダーの索敵に引っかかる事でアロウズの注意をこちらに引き付けカタロンが移送するまでの時間を稼ぐつもりだ。

その為にGN粒子はあまり散布せずに移動している。

レーダーの索敵圏内に入つて20分ほど経過した。

「そろそろ索敵空域に入るわ、ガンダムを出して。」

ブリッジのシートに座りスマラギは作戦プランを考えながら指示を出す。

「第1、第2デッキ、ハッチオープンです。」

「アリオス、セラヴィー発進準備。」

フェルトとミレイナがガンダムの発進を進めていく。

ブトレマイオスのハッチが開放される。

モビルスーツデッキからリフトでセラヴィーが運ばれる。

足をカタパルトで固定される、目の前には青い空が広がっていた。

「リニアカタパルト、ボルテージ上昇。射出タイミングをセラヴィーへ譲渡します。」

「了解。セラヴィー、ティエリア・アーデ行きます。」

ティエリアがアームレイカーを動かすとカタパルトが火花を上げ高速で移動する。

そのまま勢いに乗りセラヴィーは飛び出した。

それに続きアリオスも発進体勢に入つた。

「ユーハブコントロールです。」

「I have control アレルヤ・ハプティーズム迎撃行動に入る。」

片言のミレイナの指示に従いアレルヤのガンダムも発進する。

「続いてケルディム、ダブルオーの発進に入ります。リニアシステ

ムクリア、射出タイミングを譲渡します。」「ハロ、今日は本気モードで行くぞ！」

「リョウカイ、リョウカイ」

ケルディムの「クピット」でオレンジ色のハロが耳をパタパタとしている。

「ロックオン・ストラトス狙い打つ！」

ケルディムが2機に続きプトレマイオスから発進する。

刹那はイアンに調整したダブルオーの説明を受けていた。
機体には新たに7本の剣が装備されていた。

「いいか、セブンソードは急場凌ぎの武装だ。装備も重くて機動性
も少し落ちる、無理はするなよ。」

「了解、刹那・F・セイエイ出る！」

7本の剣を見に纏いダブルオーが発進する。

白いパイロットスーツを着たバナージはユニコーンの新しい武装の
使い方を頭の中でイメージしていた。

「アサルトカービンって武器、使いこなせるのか、俺に？」

ユニコーンが右手に握っているのは本来ケルディムが装備するはず
だった。

だがビームサーべルしか武器がないのでは戦つ事が出来ない為、急
遽ユニコーンにも使えるように調整した。

「バナージさん！」

コクピットのモニターにミレイナの顔が映し出される。

いつもの事だがバナージは彼女のテンションに慣れなかった。

「そのアサルトカービンはGN粒子を貯蔵してユニコーンさんにも
撃てるようにならせていました。でもあまり数は撃てませんので注
意してくださいです。」

「分かりました、エネルギーに注意すればいいんですね？」

「はいです！進路クリア、発進どうぞです！」

「バナージ・リンクス行きます！」

カタパルトに射出されユニコーンは大空へと飛び出した。

第十七話 再び戦地へ（後書き）

正直セブンソードは映像化されていないのであまり分かりませんがいろいろ資料を調べて次の話で書きたいと思います。
詳しく述べている方が居ましたらアドバイスしていただけるとうれしいです。

ヨーロッパの武器は今回はアサルトカービングで行きます。
コメントを書いてくれた皆さんありがとうございます！

第十八話 ミスター・ブシード

ブリーフィングルームでマネキンはレーダーの索敵網に探知されたソレスタルビーイングの輸送船の撃破の為作戦会議を開く。

「監視衛星がソレスタルビーイングの所在を掴んだ。モビルスーシ隊はプランE-3で輸送艦を包囲する。」

スクリーンに映し出される地形図を元にマネキンはブリーフィングルームの集まつた兵に説明をして行く。

「そこで我々は・・・」

「失礼する。」

「お前は・・・」

「肩に動力のある2個付きのガンダムは私が合間見える。干渉、手助け、一切無用。」

作戦会議の真っ最中だと言うのに突然扉を開けて彼はやつて来た。マネキンは途中で話に割つて入ってきた事と、作戦を聞かず単独行動をすると言う彼に苛立つ。

「何だと・・・！」

ブリーフィングルームが作戦前の緊張した空気とは違い一触即発が起こりかねない空氣に変わる。

それを見かねた一人の兵士が立ち上がりマネキンをなだめようとする。

「まあ、いいではないですか？マネキン大佐。ライセンスを持つ噂のミスター・ブシード、その実力拝見したいのです。」

彼は威嚇するように棘のある言葉でそう言った。

ソレに続くように部屋に居る者すべてがミスター・ブシードに煽る様な眼差しを向ける。

だが彼はそんな事は一切気にしなかった。

「（）期待にはお答えしよう。叱らば。」

一言そう言つとミスター・ブシードは立ち去つた。

顔に付けている仮面の奥の瞳には何が写っているのだろうか？

「・・・作戦を開始する。」

マネキンは彼をじっと見つめるとソレスタルビーアイングの打倒の為作戦を開始する。

「「はつ！」」

全員が起立しマネキンに敬礼をする。

彼女もそれに答えて敬礼を返すと兵達は各自のモビルスーツに搭乗する為に部屋から出て行く。

連邦軍の大型空母からアロウズのモビルスーツが隨時発進をして行く。

最新型のジンクスとアヘッドで構成されたモビルスーツ部隊が飛び立つていく。

その中に一際目立つ赤いアヘッドが居た。

頭部には兜を模した大型アンテナが付いており、胴丸状の胸部追加装甲が施されている。

その姿はまるで鎧武者のようなだ。

「ガンダムを確認した、これより作戦行動に入る。これより各小隊に分かれてガンダムを各個撃破する。ミスター・ブシドー？」

「何か？」

「ドライバー一つのガンダムは任せますよ？」

「望む所だと言わせて貰おう。」

今回の作戦にもソーマ・ピーリス、彼女は参加していた。

自身の脳量子派を乱すアレルヤを今度こそ仕留めてみせる。

「我が隊の目標は羽根付きだ。」

「了解です、中尉。」

ピーリスの部下であるアンドレイ・スマルノフは通信でそれに答える。

「行くぞ！』

ピーリスの機体に続き3体のジンクスが付いていく。

「ついに仇が討てるよ、パパ、ママ。」

その中でルイス・ハレヴィイは憎しみの光りを募らせていた。

「敵機を視認、これより作戦行動に移る。」

テイエリアがアロウスのモビルスー^トを見つけた。

従いコンビネーションを取りながら攻撃を開始する。各機散開するとセラヴィーのGNバズーカを両肩のGNキャノンと連結させる。

「ツインバスター キヤノン、発射！」

力出力のビームが瓦礫中のモビルアーマー部隊は発射され
たが今までのガンダムの戦闘データの分析も進んでおりビームはあ
つさりと回避されてしまう。

「落ちろガンダム！」

ティエリアは素早く反応しGNバズーカを両肩から切り離す。

その一瞬、敵の動きが止まる。

REVIEWS

「避けた！？」

ビームを避けたジンクスがGNランスに搭載されているバルカンを撃つ。

ティエリアは回避行動を取りながらGNフィールドを展開し機体を守る。

「俺の事忘れてもらひつちや困るぜ。」

ジンクスの右足にビームが突き刺さり破壊される。

バランスの崩れた機体にもう一撃、ビームが飛んで来る。

ビームは脇に当たりジンクスを2つに両断すると爆発した。ロックオンの乗るケルティムが海上スレスレを仰向けに飛行しながら狙い打つたのだ。

「メイチュウ、メイチュウ。」

「言つただろ、今日は本気モードだつて！」

スコープを覗きながらロックオンは次のターゲットに狙いを定める。刹那、アレルヤ、バナージは3機で連携を取りながら確実に敵機の数を減らしていった。

「僕が敵をかく乱する、その間に！」

「了解、バナージは援護してくれ！」

「分かりました。」

アリオスが単機でモビルスーツ部隊に突入する。

一斉にアリオスにビームが飛んで来る。

アレルヤは巧みな操縦技術で機体をコントロールしすべての攻撃を回避する。

ガンダムの高い運動性能が超兵の反応速度に答えてくれる。

GNビームサブマシンガンを構え敵機にビームを連射していく。

回避行動を取りビームは当たらぬがそのせいでわずかな間連携を崩されてしまう。

各機の機体の間隔が広ががつてしまつ。

刹那はダブルオーの左肩にマウントされているGNバスター・ソードのグリップを握り締める。

右手でGNバスター・ソードを構えるとジインドライヴの出力を上げ機体を加速させる。

「はああああああああ！！！」

ダブルオーのバスター・ソードをシールドに発生したGNフィールドで防ごうとするジンクス。

だが刹那はGNフィールドを貫通しシールド」とジンクスの左腕を

切断する。

片腕をなくしたジンクスは後方に下がりながらランансのバルカンを連射する。

刹那はガンダムに回避行動を取らせようとするが・・・

「くつ！？機体が重い！」

イアンの言っていたように今のダブルオーにはこの武装は重量が重く機動性が下がってしまう。

とつさにバスター・ソードのGNフュールドを発生させる。

ダメージは通らないがバルカンの衝撃が「クピットを揺らす。

「くつ！？このままでは・・・」

機動性の下がったダブルオーではこの攻撃は避けきれない。

「下がってください！」

ユニコーンのアサルトカービンがジンクスの頭部を一撃で破壊した。破壊された頭部から煙をあげてジンクスにバナージはもう一度ビームを撃つた。

ビームが直撃しジンクスは爆発し破片が海へと落ちていく。

「無事ですか？」

「助かった、次へ行くぞ。」

難を逃れた刹那はまた次の目標へ向かう。

やはりダブルオーの出力ではこの装備は重すぎた。

それはバナージでも見て取れた。

タクヤの設計したフルアーマーもテストロイモードの状態でないと著しく性能が下がってしまう。

このまま機動性が下がったまま戦闘を継続するのは厳しい。だがプロトレマイオスに帰還する暇などない。

「刹那さん、今の武装だと機体が・・・」

「分かっている、武器を放棄するしかない。バナージ、後方を頼む。

「ダブルオーが先行して前に出てアリオスがかく乱した機体に狙いを定めた。」

左手にもGNショートソードを握らせる。

「目標を破壊する！」

ガンダムにバルカンを撃ちながら接近してくるジンクス、弾を回避しながら何とかショートソードの射程範囲まで近づく。

「貫つたぞ、ガンダム！！！」

大腿部装甲内からビームサーベルを引き抜きさらに加速を掛ける。

「ここだ！」

ショートソードの先端が射出されビームサーベルを握っている左腕に突き刺さった。

そのままパワー任せにアンカーを引っ張った。

「なつ何だ！？」

アンカーで姿勢の制御を一時的に出来なくなる、刹那は動きの取れない敵機の胸部にバスター・ソードを突き刺した。

「バナージ！」

「撃ちます！」

バナージにそう言つと刹那はすぐに離脱した。

刹那に構わずバナージはアサルトカービンをジンクスに撃ち込んだ。狙いは正確でビームは装甲を貫き背後のGNドライヴに当たり機体はバスター・ソードとショートソードと共に爆発する。

「刹那さん、ダブルオーに接近する機体があるです。とんでも早いです！」

ミレイナから敵の情報が通信で伝えられる。

レーダーで確認するとダブルオーに向かい単機で接近してくる機体がある。

「あの新型は！？バナージ、アイツは俺がやる、アレルヤの援護を頼む。」

「でも一人じゃ！？」

返事も聞かぬままダブルオーは接近してくる敵に飛んでいく。遠ざかるダブルオー、バナージはアレルヤの援護に向かった。

GNロングソードをライフルモードに切り替る。

ロングソードは出力は今までと比べ上がっているが連射性能が下がつてしまっている。

接近してくる機影にビームを放つ、スラスターを右に噴かせ回避する。

すぐにもう一撃ビームを放つがこれもまた避けられてしまう。

「射撃も上手くなった。」

彼の為に作られた専用機、アヘッドサキガケ。

そのコクピットの中でパイロットのミスター・ブシドー、グラハム・エーカーは喜びに震えていた。

刹那は射撃に見切りをつけソードモードに切り替え相手に振りかかる。

「はあああ！」

「ソレでこそだ少年！！！」

日本刀の様な刀身のGNビームサーベルを左腰から引き抜く。鍔迫り合いになるガンダムとアヘッドサキガケ、再び合戦見える二人。

これもまた世界の歪みなのだろうか・・・

第十八話 ミスター・ブシード（後書き）

アドバイス、感想お待ちしております。

第十九話 宿命の第一戦

鍔迫り合いになる両者、刹那は慣れない武器での戦闘に苦戦を強いられていた。

重量バランスが整つておらずツインドライヴの出力も低下してしまった。

その事を戦いの中でグラハムは気付いていた。

「その新装備、使いこなせていないようだな！」

アヘッドのビームサーベルを振り払う。

接近戦に特化した機体のアヘッドは今のダブルオーと比べて戦闘能力が高い。

機体のポテンシャルをフルに使い切る事で接近戦ではガンダムと対等に戦う事も可能なように設計されている。

そしてグラハムにはそれが出来た。

「ぐつ！？」

アヘッドのパワーに握っていたGNロングソードを振り落とされてしまう。

そのパワーで機体のバランスも崩されてしまい背部から海に落ちそうになる。

両手に武器の無くなつたダブルオーにグラハムの猛撃が迫る。ビームサーベルでガンダムに斜めに一閃する。

「いいや、まだだ！」

刹那はガンダムの右足を蹴り上げた。

ふくらはぎに増設されたハードポイントにGNカタールが装備されている。

刃にはクリアグリーンの新素材を使用しており超高温で高い切断力を生み出している。

ビームサーベルを右足のGNカタールで無理やり斬り付けるとぶつかり合つた刃から激しく火花が飛び散る。

「このような技を持つてはいるとは、うれしいよ少年！」

刹那はGNカタールで攻撃を斜めに受け流す。

そのまま勢いを付け機体を一回転させ姿勢を元に戻すと振り向き様に左手にビームサーベルを握る。

だがグラハムの反応も素早く再びビームサーベル同士で鍔迫り合いになる。

「やるな・・・！」

「この程度の攻撃で、私を倒す事など！」

刹那はガンダムの背中を反らせ今度は左足のGNカタールをアヘッドのわき腹に向けて蹴り上げる。

「やらせはせん！」

グラハムは蹴りが届く前に右腕のシールドで足を受け止めようとした。

だが彼は新装備で性能の下がっているダブルオーに僅かながら油断があった。

足に装備されているGNカタールの向きが変わった。

今まで地面上に向かつて装備されていたダブルオーの前方に向きが変わりリーチが伸びた。

しかしシールドに突き刺さりはしたが装甲にはダメージが通らない。それを見ると左足からGNカタールをバージする。

「GNダガー！」

素早い動きで右手でGNビームサーベルをダガーモードに出力を合わせシールドに刺さつてGNカタールに目掛け飛ばす。

ダガーはそのまま突き刺さり貯蔵されていたエネルギーが爆発する。爆発でアヘッドの右腕が破壊されてしまう。

だがこの程度の事で引く彼ではない。

その隙にアヘッドから距離を取る刹那、背を向けて海面の上を移動するダブルオーをグラハムは見逃さない。

「逃がすものか！」

ダブルオーを見つけるとアヘッドをフルパワーで加速させる。

加速による物凄いGが体に掛かるがそんな事は気にはしない。

残った左腕のビームサーベルを渾身の力を込めて振りかぶる。

再び接近するアヘッドに振り返るとビームサーベルで受け止める。

「こ」のままでは・・・！」

こんな所で時間を掛けすぎては作戦に支障が出てしまう。

それに新型のアヘッドの性能とパイロットのグラハムの技量が想像以上に高い。

残りの武装も少なく押し切られるかもしれない。

この状況を打破する為、刹那はダブルオーの右足のGNカタールで海面を蹴り上げた。

高温の刃が海水を水蒸氣に変え少しの時間ではあるがスモークの変わりになる。

アヘッドのビームサーベルが空を斬つた。

「田ぐらましなど。」

グラハムは精神を集中させ周囲の空氣を感じ取る。

この場ではレーダーなど無用、信じられるのは己の心眼のみ。スモークで視界の見えない中に一瞬緑色の光りが横切った。

「！！！」

ビームサーベルを横に一閃すると飛んできたGNカタールを弾き飛ばす。

これは次への攻撃を繋げる為の布石、本命は・・・

「後ろだ！」

ダブルオーとアヘッドのビームサーベルが交わり激しく火花が飛び交う。

グラハムは小手先の技で戦うガンダムに苛立ちを感じていた。

「歯ごたえがない！手を抜くか、それとも私を侮辱するか！」

怒りがそのままパワーとなりダブルオーを押して行く。

このままでは負ける、刹那は覚悟を決め残された手段を使う。

「ガンダム、引導を渡す！」

「トランザム！！！」

刹那が叫ぶとトランザムシステムが発動する。

オリジナルの太陽炉に搭載されているシステムで高濃度圧縮粒子を全面開放する事で機体の性能を一定時間ではあるが上昇させる。

「これは！？」

ダブルオーのスピードが今までとは比べ物にならないほど早くなる。その姿にグラハムは歓喜した。

「そうだ、それとやりたかった！」

「止まぬ速さに動くダブルオー、メインカメラのセンサーも

正面から迫るダブルオーにグラハムはビームサーべルの出力を下げた。

それによりグリップの根元に少しビームが発生していっているのみでとても飛行可能。

「修行の成果、試させてもらひ。」

その構えは日本刀の扇合い転りの構えと同じだ。

トランザムで接近するダブルオーに斬る瞬間にのみビームの刃を発生させる。

アヘッドを通りすぎるダブルオー、その手にはビームサーべルがしつかりと握つていた。

「やがて元気になつた少年・・・」

左腕が斬り落とされる、勝ったのは剣那。

コクピットには警告音が鳴り響き戦闘画面にはオーバーロードの文字が出ていた。

出力が上がらずダブルオーは海に沈んだ。

「オーバード!?」

もうダブルオーには戦闘能力は無い、それを見てグラハムは撤退し

た。

「相打ちしたいが、私の負けだ。また会おう、少年！」

刹那の指示に従いアレルヤの援護に入るバナージ。

アリオスはルイスとアンドレイの2機のジンクスヒーリスの搭乗したアヘッド・スマルトロンに囲まれていた。

続ける。

2機による連携をアレルヤはアラタリを吹かし巧みに避けしていく。コニーハークの射程範囲まで近づいたバナージはその1機に狙いを定める。

「当たつてくれよ。」

カービングのトリガーを引く。
流口からザンザンと発射されるゾフヌーが飛び立つ。

銃口からビームが発射されシンケスに飛ぶ。

ハーフのハーフは敵であるカンガルーにしか目が行っていない。ビームが左腕に直撃し破壊されてしまい、その時になつてやつと白

「何！？どこから攻撃が・・・！」

准尉、新手だ。私が前にいく、援護を！」

シンクス2機の連携攻撃が止む。エニーリンをアリオスに接近させ
るバナージ。

「無事ですか?」

「助かってよ、刹那は？」

「アノ人なら大丈夫です、とにかくここを切り抜けましょう。」

ピーリスは背部の大型スラスターを吹かしビームサーべルを引き抜

く。

「来ます！」

ピーリスの機体に銃口を向けるバナージ。

だが脳量子派でパイロットがピーリスだとアレルヤは気付いていた。

「待ってくれ、アレにはマリーが！」

「マリー・・・？」

アレルヤの呼びかけに攻撃を止め回避行動に切り替える。

接近するアヘッドのビームサーベルが振りかぶる。

ランドセルのバニーを吹かし高度を上昇させるとコニコーンを回避させる。

アレルヤは通信でピーリスを説得しようと必死に叫ぶ。

「僕だよ、マリ、アレルヤだ。昔、ラボで一緒に居た・・・」

「私はマリーなどと言ひ名前では無い。私は超兵だ！」

だがアレルヤの声は彼女には届かなかった。

バナージは2人の脳量子派を通してその事に気付き始めていた。

「このままじゃダメだ！」

彼女は暗い心の中に引きずり込まれている。

このまま呼びかけても声は届かない。

心の呪縛を解いて上げないと、でもどうしたら・・・

バナージはかつての戦いを思い出す。

ロニーさんもマリーダさんもリディ少尉だって戦いの中で分かれうことが出来たんだ。

だからあの2人だけで出来るはずなんだ。

でも今のままでは説得もままならず倒されてしまう。

「アレルヤさん、避け！」

ピーリスのアヘッドがビームサーベルを突き刺そうと突撃して来る。だがアレルヤは避けなかつた。

右腕を故意に前に出しビームサーベルを受け止める。

当然ビームの刃が装甲を貫ぐが左手でがつちりとアヘッドを掴み放さない。

ビームが装甲を溶かし火花が飛ぶ、コクピットが激しく揺れる。

「もう放さない、マリー。」

「コイツ・・・！」

ピーリスはアームレイカーを動かすが機体はビクとも動かない。

「アレルヤさん！くつ！？」

アンドレイとルイスのジンクスがゴニコーンに攻撃を仕掛けてくる。バナージが応戦する為田を放すとアリオスのGモードライヴがオーバーロードで出力が下がる。

アヘッドとアリオスは抱き合つたまま落下していく。

第十九話 宿命の第一戦（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております。

第一十話 離別（前書き）

あまり話しが進まずスイマセン。
アサルトカービンの次は何の武器を使えばいいんだ！？
とりあえず次の話にマリーダさんを出す？予定です。

第一十話 離別

バルカンの弾をシールドを前に出し防ぎながらGNアサルトカービンを放つ。

正確な射撃がアンドレイに迫るが落ち着いてシールドのGNフィールドを発生させる。

銃口から発射されたビームがシールドに受け止められ相殺されてしまう。

「ビームが効かない、あの機体にもエフィールドがあるのか？」
擬似太陽炉により連邦軍の技術も飛躍的に上昇し今ではGNフィールド発生装置を作れるまでになった。

だがガンダムとは違いまだシールドに限定してしか発生する事は出来ない。

ココに着たばかりのバナージはGNドライブの特性をまだ把握していないなかつた。

「沈め角付き！」

アンドレイは機体を加速させビームサーベルを振りかぶるうとした。コニコーンはジンクスが腕を振るよりも早くスラスターで機体を制御しスルリと横に回避した。

「そんな・・・避けた！？」

その超人的な反応速度にアンドレイは驚いた。

シールドで受け止めるならまだしも避けるだなんて！

機体の性能だけではない、何なんだコイツは・・・？

「今はコイツに構っている時間はないんだ。アレルヤさんを助けないと！」

コニコーンの右足から蹴りが飛んで来る。

脇腹の装甲に重い衝撃が掛かりコクピットにいるアンドレイを激しく揺らす。

「ぐあああああああっ！？」

機体にはたいしたダメージはないが意識が飛びそうになる。
そのわずかな間は制御が出来ず無防備な状態になってしまつ。

「よくも少尉を！」

機体を立て直したルイスが援護に入る。

バルカンを敵に向かい一心不乱に撃ち続ける。

「落ちろ角付き！！！」

「また来る！？」

回避行動を取りながら左腕のシールドで避け切れない弾を防ぐ。
同時にGNアサルトカービンをジンクスに1発だけ放つ。
攻撃する事に夢中なつているルイスはスラスターを必要以上に吹かし機体を大きく移動させてしまつ。

「動きすぎたな。」

操縦桿を素早く操作しトリガーを2回引いた。

ビームが発射されるときのノックバックがあるにも関わらず2発目のビーム射撃も正確だつた。

1発目のビームが右足にかすめる。

「くっ！？」

機体の制御に乱れが生じてしまつ、2発目のビームが右手に握っていたGNランスに直撃し破壊されてしまつ。
ルイスの目の前には武器を構えたコニコーンが居る。
マニアピュレーターも動かなくなつてしまい攻撃を防ぐ手立てはもう無い。

「殺られる・・・！？」

目に見える風景がスローモーションで動いているようだつた。

死を覚悟したルイス、両親の仇も討てぬままここで死んでしまうの・
・・？

沙滋、最後に一目だけでも見たかつた。

まぶたをギュッと閉じ体を強張らせ死の恐怖を和らげる。

「・・・・撃つてこない？」

しかし目を閉じて数秒、機体に変化は無かつた。

恐る恐る閉じていたまぶたをゆっくりと開けると、白亜の機体はまだ目の前に居た。

「弾切れ！？こんなに早いなんて・・・！」

トリガーを引くが銃口からビームは発射されなかつた。武器に貯蔵されているGN粒子が底を突いたのだ。

GNドライブ搭載機なら自身のGNドライブの粒子を武器にチャージする事でエネルギー切れを防ぐ事が出来る。

しかし核融合炉で動いているユニットにはそれは出来ない。

「もうあの機体は使えないはずだ、アレルヤさんを！」

攻撃の手段をなくしたルイスのジンクスを見て構えを解いた。

機体を方向転換させアヘッドと共に落下していくアレルヤのアリオスを探そうとする。

逃げようとするユニットにルイスはまだ戦いを挑もうと闘志を撒き散らす。

そこにアンドレイが急いで駆けつけた。

「情けのつもりか！私はまだ・・・！」

「引くんだ准尉！」

「私はまだ戦えます！」

「無理だよ、その機体はもう使えない。艦に帰艦する。」

「くつ！？ソレスター・ビーアイング！！！」

アンドレイのジンクスに引きつられてルイスは母艦に帰艦していくた。

バナージはアリオスの落丁したポイント周辺をレーダーで探索するが2機とも反応は無かつた。

目前には島がある、あそこに落ちたと願いたいが目視では確認出来ない。

海だとしたらさらに救助は困難となつてしまつ。

それにこんな場所にいつまでも居られない。

するとトレマイオスのスマラギからガンダム全機に通信が届く。

「ガンダム全機へ、ここは一時撤退します。魚雷で高濃度粒子とス

モークを出して敵の連携を分断します。

「待ってください、アレルヤさんがまだ・・・！」

「アレルやはこちらでも探索しているわ。バナーバ

度帰艦して。

「…………分かりました、帰艦します。」

苦虫を潰す思いでスメラギの指示に従づ。

すぐにトレマイオスから魚雷が2発発射された。

広範囲のスマートで視界は見えなくなり大量のGN粒子でレーダーも利かなくなる。

アロウズの指揮を執つてゐるマネキンは撤退を始めるソレスタルビーライングを見て部隊の体制を立て直す為、コチラも撤退するよう通信兵に指示を促した。

母艦が空港に着陸し、発射される
それを見た部隊長を中心にアヘッド、ジンクスが撤退していく。
その中にピーリスの機体は居ない。

「ピーリス中尉のアヘッドを口スト？そんな・・・！？」

クを受ける。

マネキンも直前の戦闘記録を元に至急捜索班を出動させた。

—スミルノア大佐に何と報告すれば……

右手の親指の爪を噛みどけるように噛むべから悩んでいた。

戦闘が終わり数時間、ピーリスが戦闘中に行方不明になつたとマネキンから情報が入つた。

マネキンの部隊は搜索を中断しソレスタークビーアイニングの追撃に出るよう上層部から命令が下つた。

命令に違反する事は出来ず彼女は搜索を打ち切つた。

その事を自らスミルノフに伝えた。

「大変申し上げにくいのですが、おそらく・・・」

「分かつた、もういい。」

「私のミスです。申し訳ありません。」

「いいんだ、彼女だつて覚悟していたはずだ。キミもそんなに気にするんじゃない。」

「・・・本当に、申し訳ありません。失礼します。」

通信が切れた、スミルノフは無言のまま彼女が戦闘していたと言つ空域に向かおうとする。

空母の通信室から出るとパイロットスーツに着替えるスミルノフ。自身でピーリスを搜索しに行こうとする。

「使える機体はある。」

「大佐！？どちらへ・・・？」

「中尉の搜索へ行く。」

「一人でなんて無理ですよ！？」

「・・・下がつている。」

整備兵の制止を聞かずにジンクスに乗り込む、GNドライブを起動させ空母から発進する。

「中尉・・・」

赤いGN粒子を輝かせジンクスは暗闇の空を飛ぶ。

第一十話 離別（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております。

第一十一話　革新へ迫る（前書き）

マリーダさんが本当に少ししか登場していません。
期待していた人にはもつしわけないです。
次回もまた出します。

第一十一話　革新へ迫る

日も沈み周囲は暗闇に包まれている。

月明かりに照らされる海をプトレマイオスは飛行する。

スマラギはミッションレコーダーでアリオスが最後に交戦したポイントを目指す。

それは陽動の為にアロウズと交戦した場所だ。

今はもうアロウズのモビルスーツ部隊も撤退しておりレーダーにも何の反応も無かつた。

だがいつまでもこんな所に留まつていては発見されてしまう可能性が高い。

アレルヤの救出は迅速に行わなければならない。

「残っているガンダム2機とバナージ君を発進をさせてちょうだい。制限時間は40分、これ以上は待てないわ。」

時間に間に合わない場合、アレルヤは置いていくしかない。彼もガンダムマイスターとして今まで世界を変えようと戦つてきてくれた。

もしものときにどうするか覚悟は出来ている。

「ケルディム、発進どうぞ。」

フェルトがガンダムの発進シークエンスを完了させるとモビルスーザデックからリフトでケルディムが運ばれる。

カタパルトに脚部が固定された目の前には地平線の彼方まで海が広がっていた。

カタパルトは火花を上げモビルスーツを強制的に前方へ射出させるそのまま飛び立った。

「続いてセラヴィー、カタパルトに固定完了。いつでも発進出来ます。」

「ミレイナ、ティエリアに繋げて。」

「はいです。」

ミレイナがパネルを手早く叩くとブリッジの通信画面にコクピットに居るティエリアの顔が映し出された。

パイロットスーツを着てヘルメットを被っているティエリアの表情はいつも以上に読み取りにくかった。

「セラヴィーにアロウズとの交戦空域のデータを転送しておいたわ。もし敵が居ても戦闘は極力避けて時間内に帰艦してちょうだい。」

「了解、ティエリア・アーデ行きます。」

彼も事情を察しているのだろう、何も聞かずにそのままセラヴィーをカタパルトから発進させた。

最後にユニコーンもリフトで上がってくる。

今回は捜索がメインなので武器は持っていない。

「必ず助けてます、アレルヤさん。」

後はカタパルトから射出し飛び出すだけ、するとミレイナから通信が繋がった。

何だろう？作戦を変更するのか・・・？

センター・コンソールを叩き回線を繋げるバナージ。

「バナージさん、がんばってください！」

「大丈夫です、必ず助けて見せます。」

そうだ、俺がもっと動けていればこうはならなかつたかもしぬないのに。

でも悔やんではかりもいられない、アレルヤさんは今も助けが来るのを待ってるんだ。

時間内に探さないと・・・！

「あつ！あと・・・それから・・・」

「どうしたの？」

「いつ！？いえ、何でもありませんです！ユニコーンさん、発進

どうぞです！」

いきなり頬を赤らめながら彼女は大声で叫んだ。

そのせいで耳に少しの間耳鳴りが鳴ってしまう。

何を伝えたかったのかはっきりしないがそれはまた後にしよう。

操縦桿を両手でしつかり握り締め全天周囲モニターが映し出す景色を見つめる。

「了解、バナージ・リンクス行きます！」
パイロットスーツが機体に掛かるGを軽減してコニーローンも発進した。

刹那はモビルスーツデッキで動かなくなってしまったダブルオーをずっと見ていた。

艦内放送でミレイナの声が響いている、ガンダムの無い今の自分では救出作戦に参加出来ない。

「モビルスーツ全機発進しましたです、これよりトレミーは潜行準備に入るです。」

もう何分ここに居るのだろうか、新しいガンダムを手にしてもまだ世界を変える事は出来ない。

こんなことで俺達は変われるのだろうか？ロックオン・・・
コクピットを降りてからずっとその場で立ち尽くしているとイアンの怒鳴り声が聞こえた。

「刹那！トランザムは使うなと言つただろうが。ツインドライブが稼動状態にあるからいいようなもの。」

これから修理する事を考えると頭が痛くなる。

ツインドライブはまだ完璧に完成された訳ではないのだ。
修理には他の機体と比べて時間が掛かつてしまつ。

イアンはどうしたものかと頭を抱えた。

「修理を頼む、アレルヤが・・・」

「分かってるよ。刹那、お前ももう休め。ガンダムは俺が見ておく。

「すまない。」

刹那はイアンの言葉を聞くとモビルスーツデッキから立ち去りつとした。

デッキと艦内とを繋ぐ扉に歩き出す。

すると突如扉が開いた、そこには彼が居た。

「沙滋・クロスロード」

「オオーラ、コツチだ！」

後ろからイアンが沙滋を手招きしならが呼んでいる。

になつた。

「いいのか、お前はガンダムに・・・」

戦うのが嫌だったはず、ソレスタイルビーアイングに参加すると言つ事は戦いに加担する事になる。

その事を彼もよく知っているはずだ。

「いいんだ、カタロンの人達が逃げられる間では何でもやるよ。」
罪の意識に苛まれているのだろうか、その目は4年前に見た彼の目
と変わっていた。

アリオスとアヘッドは組み合つたまま無人島に落下していた。落下の衝撃と今までの戦闘のダメージの蓄積でもつまともに動く事が出来ないで居た。

島に落ちてもうずいぶん時間がたつた。

脱出装置も作動せずコクピットのハッチはフレームが歪んでいる。かろうじで生きているカメラでアヘッドの様子を見るがパイロットが気絶しているのか動く気配は無かつた。

「」のまま救助が来るのを待つしかない。マリー・・・
通信でいくら呼びかけても反応は無かつた。

もし目が覚めたら僕はまた掘までしまでのたゞか
敵が見つけるのが先か、それとも味方か・・・
今は信じるしかない、みんなが救助に来てくれる事を。

マリーの人格が元に戻っていることを。
外では雨が降っている。

「ロックオンはE-56ポイント周辺の海を、バナージはそこから見える島を探索してくれ。範囲は広いが何としても探し出す。」

「こんな雨ん中海水浴かよ。」

「・・・行きます。」

プトレマイオスから飛び立つた3機は分散してアレルヤのアリオスを搜索する。

バナージは指示に従いユニコーンを島の方角へ飛ばす。
だが島は雑木林に覆われており巨大なモビルスーツでも姿勢を低くしたら簡単に隠れてしまう。

視界の悪い雨の中で探していたのではとても時間内に見つける事は出来ないだろう。

「感じるんだ、そうすれば・・・！」

バナージは諦めてはいなかつた。

この広範囲の搜索ポイントでアレルヤの存在を感じ取るとしていた。

絶望的な状況であるうと希望を捨ててはいけない。

それがバナージが戦いの学んだ事だ。

アレルヤの感応派を感じ取るうと意識を研ぎ澄まさせる。
自身の体の脈動が脳に響く。

すると上空から島の全体を見下ろしある一点に目を集中させた。

「もう一人だれか居るのか？・・・行こう。」

バニーナの出力を下げるユニコーンを島の陸地に降下させる。
島に近づくにつれて視界には木しか見えなくなっていく。

でもソレに連れてアレルヤともう一人の存在を確かに感じ取る事が出来た。

この息使いは女の人・・・？

ユニコーンを着地させると地面に何かを引きつった様な跡が続いて

いた。

大きさからしてモビルスーツしか考えられない。

その跡の先にメインカメラを向ける。

「アレは・・・!?

そこには破損したアリオスと少し離れた場所にアヘッドが横たわっていた。

バナージはユーローンを急いでアリオスの傍まで歩かせる。

「アレルヤさん、無事ですか!? アレルヤさん!」

「・・・・その声は?」

「聞こえますか? バナージです。助けに来ました。」

「よかつた、もうアリオスは動かないんだ。悪いけどトレマリーまで運んでくれないか?」

「分かりました、すぐにブトレマイオスに連絡します。」

それを聞きすぐビートレマイオスのスマラギに通信をつなげようとする。

回線を合わせようとセンター・コンソールを操作していくと・・・

「逃げる、バナージ! ! !

「! ?」

突然倒れていたアヘッドが起き上がり右手にビームサーベルを握りユニークーンに襲い掛かってきた。

振りかぶるビームサーベルをギリギリの所で相手の腕を掴み防ぐ。左からも何か来るのかと警戒したが腕はぶらんと垂れ下がつており動かないようだ。

おそらくは電気系の故障で操作しても反応しないのだ。だがこのまま邪魔されたのではアリオスを運び出せない。そうなれば倒すしかなくなる。

だがアノ機体のパイロットは殺してはいけない。

「どうすればいいんだ・・・どうする。」

必死にどうするべきか考えるが答えは見つからない。

最後まで諦めるんじゃない！それでもと言い続ける。

懐かしい声がした

しかしそれは聞こえたのではなく心の中に伝わるような感覚。

マリー・タさん・・・

今のお前とドリマーなら出来るはずだ。

「アーティストの声」で賞を決める。

ヒーロンのシステムを計算めさせね。

（馬鹿泥石見取）

つていてシートが稼動する。

頭部の塊が再び露へ出るダムは放水する。

「ガンダム・・・・」

その姿を見たアレルヤはサイコフレームの輝きに見せられていた。ヨニーハークがガンダムに変身するとオーバーロードで制御出来なくなつて、ハサウエードライヴが稼動し始めた。

「何なんだコレは？ガンダム…………！？」

目の前の白亜の機体がガンダムに変身しビーリスはすぐには思考が

近畿一ノ方舟記

子派を乱れさせる。

あつ頭か・・・割れそうだ！」

いきなり頭痛かし苦痛は顔を歪ませる
操縦桿を手放し両手で頭を抱える。

「何かが私の中に入り込んでくる！？ああああああああああああああ

! ! !

大声を上げ苦しみだすピーリス、そして彼女の意識はGN粒子とサイコフレームに導かれてアレルヤとバナージの深層意識と絡み合う。

第一十一話　革新へ迫る（後書き）

コメント、アドバイスお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2096v/>

機動戦士ガンダム00 The human race's reformation

2011年10月18日22時09分発行